

# 中居町一丁目遺跡3

(都)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

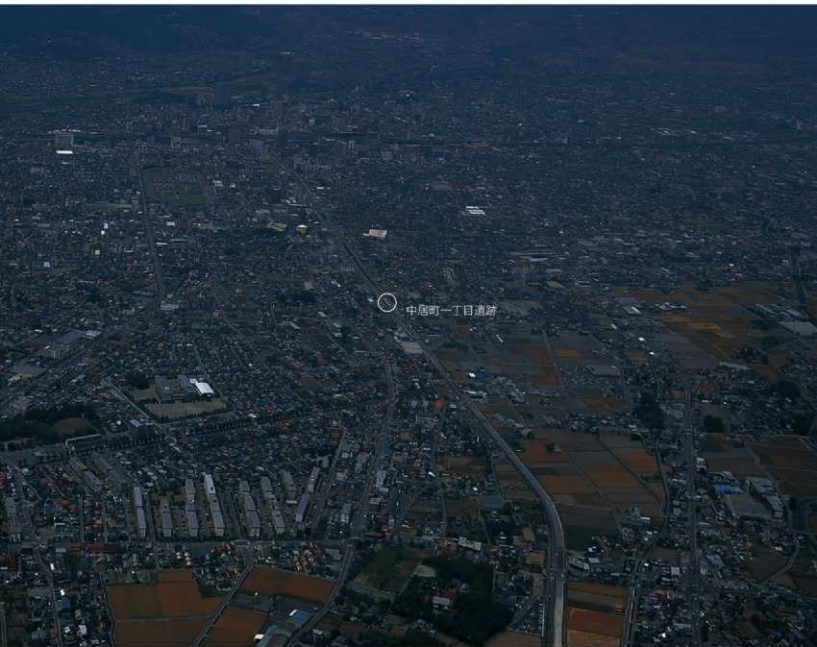
群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所  
財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

な かい まち い っ ち ょ う め い せ き ざ ん  
中居町一丁目遺跡3

(都)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

群馬県高崎土木事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



▲ 高崎市街地と遺跡群（南東から望む）



かつて、その多くの部分が水田地帯であった烏川と井野川に挟まれたこの一帯は、水田を侵食するかのようにより市街化が進んで、今ではその地形や遺跡の状況を伺い知ることが難しい。

しかし、この市街地の下には微高地と低地が交錯し、微高地上には集落遺跡が、低地には水田遺構がそれぞれ営まれていた。高崎駅東口線の道路整備に伴う一連の発掘調査は、この市街地における地形と遺跡分布の関係を知る上で絶好の機会となったのである（17頁「中居町一丁目遺跡周辺集落の動向」参照）。



▲第1面(浅間B軽石層)下面全景 (遺跡東半部, 東から, 写真上方が高崎駅東口)



▲第2面(VII層上面付近)全景 (遺跡西半部, 西から, 写真上方が玉村町方面)

## 序

高崎市と茨城県鉦田市を結ぶ国道354号線は、県内では高崎市街地と東毛地域をつなぐ主要な幹線道路のひとつです。近年、周辺地域における人口の増加等に伴った交通量の増加から、そのバイパスとして東毛広域幹線道路の整備が進められています。一方、高崎駅東口線の周辺地域は、市街化が進んで商業地域の中核地域となりつつあり、その基盤整備が急がれるところでもあります。(都)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業は、東毛広域幹線道路の一環として、このような市街地発展の要請を背景に計画されたものです。

中居町一丁目遺跡は、この高崎駅東口線地方特定街路整備事業に伴って、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成21年度に発掘調査を実施した遺跡です。この遺跡の東側と西側に隣接する微高地上では、既に同事業によって主として古墳時代前期から平安時代の竪穴住居、方形周溝墓などの集落遺跡が発掘調査されています。本調査区域は、微高地と微高地の間の微低地部に位置することから集落遺跡の発見はありませんでしたが、平安時代においては水田耕作地として利用されたものと考えられ、この地域における地形と遺跡立地の関係について示唆的な資料を提供したと言えましょう。

本遺跡の発掘調査から報告書の刊行に至るまで、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、高崎市都市整備部、地元関係者の方々から格別のご指導とご高配を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様より衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序といたします。

平成22年10月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田 栄 一



## 例 言

- 1 本書は、平成21年度(都)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業に伴う、中居町一丁目遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 報告書名については、高崎市教育委員会との協議の上、中居町一丁目遺跡(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007)、中居町一丁目遺跡2(高崎市教育委員会2010)に続く、中居町一丁目遺跡3とした。
- 3 遺跡所在地 群馬県高崎市中居町一丁目28-10
- 4 事業主体 群馬県西部県民局 高崎土木事務所
- 5 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 調査期間 平成22年2月1日～平成22年2月28日(平成21年度)
- 7 調査体制  
調査担当者 坂口 一(主任専門員(総括))  
遺跡掘削工事請負 株式会社シン技術コンサル  
委託 地上測量:アコン測量設計株式会社 航空測量・空中写真撮影:株式会社シン技術コンサル
- 8 整理期間 平成22年6月1日～平成22年8月31日(平成22年度)
- 9 整理体制  
整理担当者:坂口 一(主任専門員(総括)) 保存処理:関邦一(補佐) 遺物写真撮影:佐藤元彦(補佐)  
遺物観察(土師器・古銭):神谷佳明(上席専門員) 遺物観察(縄文土器):橋本 淳(主任調査研究員)
- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。  
編集・執筆 坂口 一(主任専門員(総括))
- 11 出土遺物と記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 12 本書の作成にあたっては次の方々には有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。  
赤塚次郎(愛知県埋蔵文化財センター) 大野義人(高崎市教育委員会) 神戸 肇(高崎市教育委員会)  
小泉範明(高崎市教育委員会) 須永光一(太田市教育委員会) 関川尚功(奈良県立橿原考古学研究所)  
滝沢 匡(高崎市教育委員会) 田口一郎(高崎市教育委員会) 田中清美(大阪文化財研究所) 角田真也(高崎市教育委員会) 寺沢 薫(奈良県立橿原考古学研究所) 深澤敦仁(群馬県教育委員会) 前原 豊(前橋市教育委員会) 石島和夫(専修大学) 高崎市教育委員会・区画整理課・都市計画課 群馬県教育委員会  
(敬称略)

## 凡 例

- 1 調査区域には、国家座標の日本平面直角座標第IX系(世界測地系)に基づいて5m間隔のグリッドを設定し、X軸、Y軸の数値を示した。
- 2 遺構図中の北は国家座標における座標北(方眼北)を示す。また、遺跡の中央部における真北との偏差(真北方向角)は $-0^{\circ} 28' 15''$ (N- $0^{\circ} 28' 15''$ -E)である。
- 3 遺構の方位は、座標北からの主軸の傾きを示す。
- 4 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
  - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒( $<0.5\text{mm}$ )、粗砂粒( $0.5 \sim 2.0\text{mm}$ )、細礫( $2.0 \sim 5.0\text{mm}$ )、中礫( $5.0\text{mm}>$ )とした。
  - (2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。
- 5 本文中で使用したテラフ記号の名称は以下の通りである。  
浅間A軽石(As-A)……………1783(天明三)年 浅間B軽石(As-B)……………1108(天仁元)年  
浅間C軽石(As-C)……………3世紀後半 浅間板鼻黄色軽石(As-YP)……………1.3～1.4万(y.B.P)

# 目 次

口絵	2 第2面(VⅧ層上面付近)・・・・・・・・ 8
序	(1) 竪穴住居・・・・・・・・ 9
例言	(2) 溝・・・・・・・・ 9
凡例	(3) 遺構外出土遺物・・・・・・・・ 12
遺構一覧表	(4) 調査のまとめ・・・・・・・・ 12
I 発掘調査と遺跡の概要・・・・・・・・ 1	III 遺物観察表・・・・・・・・ 12
1 調査に至る経緯と経過・・・・・・・・ 1	IV 調査の総括・・・・・・・・ 13
2 調査の方法・・・・・・・・ 1	群馬県下出土の布留式裏について・・・ 13
3 遺跡の位置と地形・・・・・・・・ 2	中居町一丁目遺跡周辺集落の動向・・・ 17
4 周辺の遺跡・・・・・・・・ 3	V 自然科学分析・・・・・・・・ 23
5 遺跡の基本層序・・・・・・・・ 6	写真図版
II 発見された遺構と遺物・・・・・・・・ 7	報告書抄録
1 第1面(浅間B軽石層下面)・・・・・・・・ 7	付 図
水田・・・・・・・・ 7	付図1：第1面 浅間B軽石層下面全体図(1/200)
	第2面 VⅧ層上面付近全体図(1/200)
	付図2：隣接遺跡集成図(1/1,000)
	付図3：昭和30年測図 周辺地形図1(1/15,000)
	付図4：昭和30年測図 周辺地形図2(1/5,000)

## 遺 構 一 覧 表

種 類	番 号	掲載頁			規 模 (m)			方位	柱 穴	炉・竈	貯蔵穴	備 考
		本文	写真(PL.)	短軸	長軸	深さ	面積					
竪穴住居	1	9	7	—	直径4.8m(推定) 0.50			不明	不明	未確認	未確認	縄文時代?
種 類	番 号	掲載頁			規 模 (m)			走行	立 地			備 考
		本文	写真(PL.)	上幅	下幅	深さ						
溝	1	9	7	—	0.40	0.25	0.10	N-20°-E	遺跡中央部傾斜変換点付近			古墳～平安時代
溝	2	10	7	—	0.30	0.10	0.20	N-1°-E	遺跡中央部傾斜変換点付近			不明
溝	3	10	7	—	0.40	0.30	0.20	N-59°-E	遺跡西側微高地			古墳時代
溝	4	11	8	—	0.50	0.35	0.20	N-42°-E	遺跡西側微高地			古墳時代
溝	5	11	8	9	0.60	0.40	0.20	N-41°-E	遺跡西側微高地			古墳時代前期
溝	6	11	8	—	0.40	0.30	0.10	N-29°-W	遺跡西側微高地			古墳時代前期



## I 発掘調査と遺跡の概要

### 1 調査に至る経緯と経過

(都)3.3.8高崎駅東口線地方特定街路整備事業は東毛広域幹線道路の一端で、高崎市街地と東毛地域をつなぐ主要な幹線道路として計画された。

事業予定地について、平成16年8月の群馬県教育委員会文化課による試掘調査に基づく群馬県西部県民局高崎土木事務所と県文化課との協議を経て、事業予定地の東半部について平成17年1月～同年2月に、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施し、この成果については平成19年2月に同事業に伴う発掘調査報告書として刊行した(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『中居町一丁目遺跡』)。

その後、平成16年度の調整において保留となっていた事業予定地の西半部北側について、平成21年1月の県文化財保護課による試掘調査に基づく、高崎土木事務所と県文化財保護課との協議を経て、平成22年2月1日～同年2月28日に、当事業団が発掘調査を実施するに至った。

なお、調査対象地については、事業予定地の北側に隣

接する民家、営業所等の出入りの利便及び、歩行者等の通行の安全を考慮して、事業予定地北側の生活道路部分はその対象から除外した(図1)。

### 2 調査の方法

調査対象地には既に簡易舗装が施され、生活道路として使用されていた。このため、事業予定地北側の生活道路を除いてアスファルトを除去し、さらにその下の採石を除去して調査を行った。

調査区域内には、天仁元年(1108)の浅間B軽石(As-B)がほぼ全域に堆積していた(基本土層図6頁参照)。また、県文化財保護課による試掘調査において、浅間B軽石層直下の黒色粘質土は水田耕作土である可能性が指摘され、さらに同調査において、浅間B軽石層より下位の基本土層IX層を掘り込む溝が検出されていた。

これらのことから、この遺跡では、①浅間B軽石層下面、②基本土層VIII層上面付近の2面を調査面として設定し、それぞれの調査面より上位は大型掘削機(バックフオー)によって除去した。

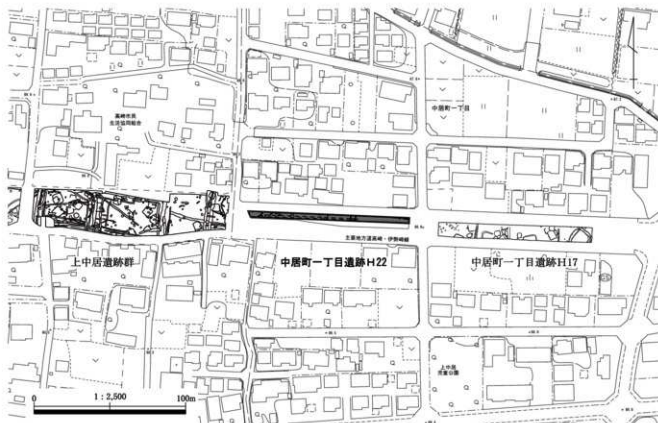


図1 発掘調査区域図(S=1:2,500, 高崎市都市計画図より)

### 3 遺跡の位置と地形

中居町一丁目遺跡は高崎市中居町一丁目に所在し、JR高崎駅の東口を起点とする高崎駅東口線（東毛広域幹線道路の一部）の事業予定地で、駅の東側約2kmに位置する（図2）。調査範囲は、高崎市土地区画整理事業による南北方向の街路で区画された東西約120mの範囲で、平成17年に当事業団が発掘調査した中居町一丁目遺跡の西側に隣接する同一の遺跡である（図1「発掘区域図」参照）。なお、この遺跡の西側には高崎市教育委員会が発掘調査を実施した、上中居土地区画整理事業による上中居遺跡群が隣接する（図3）。

中居町一丁目遺跡が立地する高崎市は群馬県の南部に位置し、大きくは関東平野の北西端部にあたる。群馬県の中央部には、最高峰の標高1,449mの榛名山が利根川を挟んで赤城山と対峙している。榛名山の南東麓には、相馬ヶ原扇状地と呼ばれる火山性の扇状地が広がるが、この扇状地に北西部で接し、西縁の烏川から東縁の広瀬川にかけては前橋台地と呼ばれる平坦地である。

この前橋台地は、約2.2万年前の浅間山の噴火に伴う

大規模な山体崩壊による前橋泥流堆積物とその基盤を構成している。前橋台地内には、現井野川の流域に段丘と谷底平野で構成される、幅約15kmほどの井野川低地帯と呼ばれる低地帯が北西から南東の方向に形成されている。この井野川低地帯を境に西側は、特に高崎台地と呼ばれている（図4）。

高崎台地上には、その基盤である前橋泥流堆積物の上位に、高崎泥流と呼ばれる泥流が堆積している。また、井野川低地帯の高位段丘には、高崎台地と同様に高崎泥流が堆積しているとともに、その低位段丘には6世紀代の榛名山二ツ岳の噴火に関連した泥流の堆積が認められている。

中居町一丁目遺跡は、それぞれ南東流する烏川と井野川に挟まれた高崎台地上で、井野川低地帯の右岸縁辺部に位置する。この烏川と井野川に挟まれた範囲には、小河川の旧流路による樹枝状の低湿地が形成されており、このために微高地と低湿地が複雑に入り組んだ地形を形成している。

遺跡の周辺では宅地化が進んでその微地形を伺い知することは難しいが、遺跡の東側は井野川低地帯で現在は水



図2 遺跡の位置図(S=1:20万)

田地帯を形成している。一方、遺跡の西側は高崎台地の微高地部で、現在はほぼ高崎駅まで宅地化が進んでいる(図4、巻頭カラー写真)。したがって、遺跡の地形は西側の微高地部から東側の低地部にかけて緩やかに傾斜し、現地表面の標高は西端部が89.4m、東端部が88.7m、比高70cmで、平均的な勾配は約0.7%である。なお、この勾配は浅間B軽石層直下においてもほぼ同様である。

本報告書の中居町一丁目遺跡は、東側に隣接する平成17年調査の中居町一丁目遺跡(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『中居町一丁目遺跡』)と同一の遺跡である。但し、本報告書の中居町一丁目遺跡は、特にその東端部が僅かな谷地形となり、おそらくその中心は生活道路の確保のために調査対象地から除外した遺跡間の交差点部分にあると考えられる。したがって、本報告書の中居町一丁目遺跡から平成17年調査の中居町一丁目遺跡にかけては、一見すると西側の微高地部から東側の低地部に漸移的に移行するように見えるが、その間に小さな谷地形が入り込むものと考えられる(図6「基本土層柱状図」参照)。

#### 引用文献

早田 勉 2003 「前橋台地と広瀬川低地帯の地形分類図」『新編高崎市史』通史編1 高崎市

## 4 周辺の遺跡

この遺跡の周辺では、開発行為などに伴って数多くの遺跡が発掘調査されている。ここでは、本遺跡の時代に近い主として縄文～平安時代の遺跡を概観する。なお、旧石器時代については、烏川から井野川にかけてのこの周辺地域に約1万年前と推定されている層厚数mの高崎泥流が堆積していることから(新井他1993)、この周辺における発見例は皆無である。

縄文時代では、烏川右岸の観音山丘陵において多くの遺跡が分布するが、この遺跡が立地する高崎台地上においては前期から後期にかけての土器や石器の出土例は認められるものの、遺構として確認できる遺跡の分布は極めて少ない。本遺跡の西側に隣接する上中居遺跡群(3)では、前期後半及び中期中葉～後期中葉の多量の土器や石器が出土しているが、住居として確認できるものは皆無で、遺構の多くは主として集石遺構である。また、本遺跡の東北東約1.8kmに位置する高崎情報団地遺跡(26)では、中期後半からの大規模な集落が確認されており、この周辺地域では屈指の遺跡である。

弥生時代になると縄文時代とは対照的に、主として中

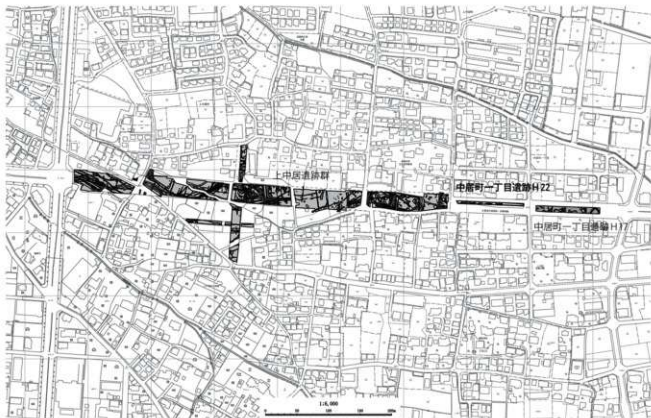


図3 周辺遺跡の発掘調査区域図(S=1:6,000)

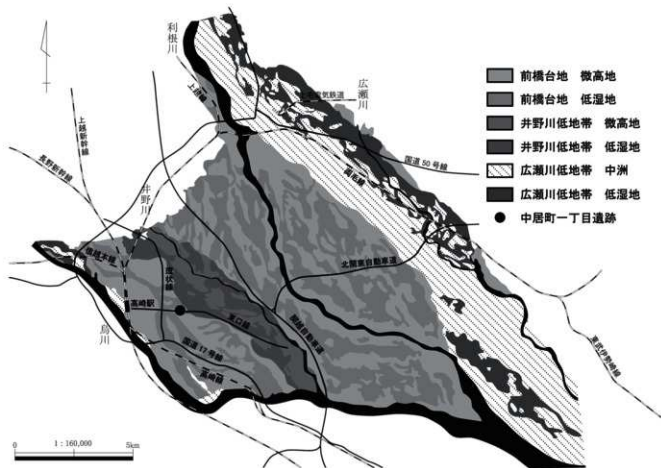


図4 前橋台地の地形分類図 (S = 1 : 16万, 早田2003より)

期後半以降に前橋・高崎台地上では多くの遺跡の分布がみられるようになる。特に、昭和初期に本遺跡の西側約2.5 kmに位置する高崎市竜見町(位置図外)で発見された土器群は、竜見町式土器として群馬県下における中期後半の標識となっており、その象徴的な存在の遺跡である。この他にも、本遺跡の西南西1.2kmの高崎競馬場遺跡(22)、北西約1 kmの高岡塚村遺跡(15)、西約1 kmの高岡村前遺跡・村前Ⅱ遺跡(14)、西約3 kmの高崎城三の丸遺跡(位置図外)などで、中期後半の集落や墓が確認されている。

弥生時代後期では、特に大規模なものは東北東約1.8 kmに位置する高崎情報団地遺跡(26)である。この遺跡では、弥生時代後期集落や方形周溝墓が確認されている。また、本遺跡の西北西2 kmの東町Ⅲ・Ⅳ遺跡(31・32)では弥生時代後期と考えられる溝が、北東約1.5 kmの南大類東沖遺跡(16)では、弥生時代後期と考えられる方形周溝墓が確認されている。

古墳時代前期になると、さらに遺跡の分布は広がる。この時期では、本遺跡の東側に隣接する平成17年調査の中居町一丁目遺跡(2)、西側に隣接する上中居遺跡群(3)

で古墳時代前期の集落と方形周溝墓が確認され、中居町一丁目遺跡では方形周溝墓から出土した南関東地方に起源をもつ壺が特徴的である。なお、東町Ⅲ・Ⅳ遺跡(31・32)では古墳時代前期の水田も確認されている。

古墳時代中・後期では、本遺跡の南約900 mに墳丘長133 m(推定)で、横穴式石室と推定されている前方後円墳の越後塚古墳(消滅)の他、小規模な円墳と考えられる墳墓が散在的に分布する。また、前述の高崎情報団地遺跡(26)では多数の古墳と夥しい数の住居が確認されている。

奈良・平安時代では、集落が高崎台地上に広く分布し、特に天仁元年(1108)の浅間B軽石(As-B)直下の水田は、この地域のほぼ全域から確認されている。

以上、周辺の遺跡を概観してきたが、本遺跡周辺の高崎・前橋台地上では、弥生時代中期後半以降、井野川低地帯の縁辺部を中心に多くの遺跡が分布している。これは、井野川低地帯における生産基盤としての開発過程を示しているものと考えられよう。

#### 引用文献

新井雅之他 1993 「およそ1万年前に発生した高崎記述の分布と起源」『日本地質学会第100年学術大会発表要旨』日本地質学会





図5 周辺の遺跡位置図(S=1:25,000)

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	文献
1	中磨町一丁目(H22調査)	縄文時代集落、古墳時代溝、平安時代水田	本報告書
2	中磨町一丁目(H17調査)	古墳時代集落・方形周溝墓、平安時代集落	「中磨町一丁目遺跡」県埋文事業団 2007
3	上中居遺跡群	縄文時代集石遺構、古墳時代集落・方形周溝墓、奈良時代水田、中・近世城跡	「上中居遺跡群」高崎市教委 2009
4	岩狸町Ⅰ	平安時代水田	「岩狸町Ⅰ遺跡」高崎市教委 1994
5	岩狸町Ⅱ	平安時代水田	「岩狸町Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
6	岩狸Ⅲ	平安時代水田、近世畑	「年報29」県埋文事業団 2010
7	圓久保	奈良・平安時代水田	「圓久保遺跡」高崎市教委 1983
8	柴崎南大類	古墳時代溝、奈良・平安時代集落・水田	「柴崎遺跡群、南大類遺跡群」高崎市教委 1993
9	念弘塚古墳	墳形・規模不明	「新編高崎市史」資料編Ⅰ 高崎市 1999
10	稲荷塚古墳	円墳、規模不明	「新編高崎市史」資料編Ⅰ 高崎市 1999
11	上中居西原敷Ⅱ	中・近世館	「上中居西原敷Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1997
12	上中居辻築師Ⅰ	平安時代水田、中世館、近世土壇墓・井戸	「上中居辻築師Ⅰ遺跡」高崎市教委 1989
13	上中居辻築師Ⅱ	古墳時代集落・方形周溝墓、中・近世掘立柱建物	「上中居辻築師Ⅱ遺跡」高崎市教委 1992
14	高岡村前・村前Ⅱ	縄文・弥生・古墳・奈良時代集落、平安時代水田、中世集落	「高岡村前遺跡」高崎市教委 1993、「高岡村前Ⅱ遺跡、高岡東沖・稲荷遺跡」高崎市教委1995
15	高岡東村	縄文・弥生時代溝	「高岡東村遺跡」高崎市教委 1992
16	南大類東沖	弥生時代方形周溝墓、奈良・平安時代水田	「南大類東沖・稲荷遺跡」高崎市教委 1997
17	南大類稲荷	古墳・奈良・平安時代水田、平安時代集落	「南大類東沖・稲荷遺跡」高崎市教委 1997
18	柴崎西浦・吹手西	古墳時代溝、奈良・平安時代集落	「西浦・吹手西遺跡」高崎市教委 1991、「西浦・集人・吹手西遺跡」高崎市教委 1992
19	天王前	古墳・奈良・平安時代水田・水路	「天王前遺跡」高崎市教委 1982
20	下中之城釜里	縄文・古墳時代集落、奈良・平安時代集落・水田、中世井戸溝	「下中之城釜里遺跡Ⅲ」高崎市教委 1996
21	下中之城釜里	古墳・奈良・平安時代水田、中世掘立柱建物	「下中之城釜里遺跡Ⅲ」県埋文事業団 1981
22	高崎競馬場	弥生時代土器	「新編 高崎市史」資料編Ⅰ 高崎市 1999
23	上中居西原敷	奈良・平安時代水田	「上中居西原敷遺跡」高崎市遺跡調査会 1994
24	上中居早場遺	古墳・奈良・平安時代・中・近世溝	「上中居早場遺跡」高崎市教委 1992
25	上中居平塚Ⅱ	古墳・奈良・平安時代水田	「上中居平塚Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
26	高崎情報団地	縄文時代集落、弥生時代集落・方形周溝墓、古墳時代墳墓・集落、奈良・平安時代水田・掘立柱建物、中・近世館	「高崎情報団地遺跡Ⅰ」高崎市遺跡調査会 1997 「高崎情報団地遺跡Ⅱ」高崎市遺跡調査会 2002
27	柴崎村間	古墳時代土坑、中世溝・井戸	「柴崎村間遺跡」高崎市遺跡調査会 1990
28	下村北	奈良・平安時代水田、中世館	「下村北・砂内遺跡」高崎市教委 1986
29	城南小校庭	高崎市城南小学校校庭生跡遺跡	高崎市教委 1973
30	栄町Ⅰ	平安時代水田、近世溝状遺構	「栄町Ⅰ遺跡発掘調査報告書」高崎市遺跡調査会1996
31	東町Ⅱ	弥生時代水路、古墳・平安時代・近世水田	「東町Ⅱ遺跡」高崎市教委 1994
32	東町Ⅳ	弥生時代水路・土坑、平安時代水田	「東町Ⅳ遺跡」高崎市教委 1995
33	越後塚古墳	前方後円墳、規模133.2m(推)、横穴式石室?、現在消滅	「新編高崎市史」資料編Ⅰ 高崎市 1999

## 5 遺跡の基本層序

本報告書の中居町一丁目遺跡(「中居町一丁目遺跡H22」)では、調査区域のほぼ全域に天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)が、層厚約10cmの良好な状態で一次堆積している。また、Ⅶ層の黒褐色粘質土中に浅間C軽石(As-C)と考えられるφ1~3mmの白色軽石を僅かに含み、Ⅸ層の高崎泥流中には浅間一板鼻黄色軽石(As-YP)と考えられる黄褐色軽石を含むが、いずれも未分析。

また、平成17年調査の中居町一丁目遺跡(「中居町一丁目遺跡H17」)では、浅間B軽石の一次堆積層は存在せず、攪拌されて土壌化したいわゆる浅間B混土となっている。

なお、中居町一丁目遺跡H17の4層は、その報告書において「前橋泥流層」との記載がされているが(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『中居町一丁目遺跡』p.3)、これは高崎泥流の誤りである。

### 中居町一丁目遺跡H22

- I 表土。現水田耕作土。浅間A軽石(As-A)含む。
- II 灰黒色粘質土。現水田耕作土。浅間A軽石(As-A)含む。
- III 暗茶褐色土。多量の浅間B軽石(As-B)含む。
- IV 青灰色・赤褐色粗粒スコリア。浅間B軽石(As-B)一次堆積。
- V 灰黒色粘質土。
- VI 灰白色粘質土。洪水層起源の水田耕作土。
- VII 黒色粘質土。上位にφ1~3mmの浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を僅かに含む。
- VIII 灰黄褐色シルト。
- IX 灰黄色シルト。高崎泥流。小礫、φ2~5mmの浅間一板鼻黄色軽石(As-YP)と考えられる黄褐色軽石をブロック状に含む。

### 中居町一丁目遺跡H17

- 1 灰褐色土。As-Aを多量に含む。
- 2 灰黄褐色土。シルト質でAs-Bを含む。
- 3 黒褐色土。上位にAs-Cをまばらに含む。
- 4 黄褐色土。泥流堆積物で小礫を含む。

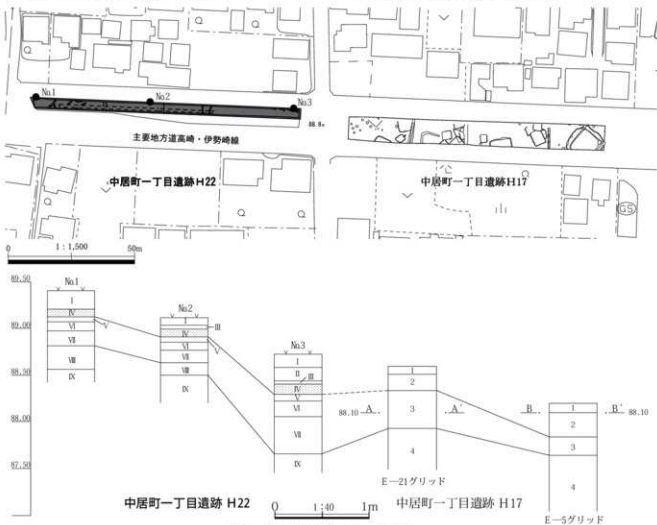


図6 基本土層柱状図(S=1:40)

## II 発見された遺構と遺物

### 1 第1面(浅間B軽石層下面)

#### 水田

調査面の第1面は、基本土層IV層の天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石層(As-B)の直下面である。浅間B軽石層は、調査対象地のほぼ全域に層厚約10cmの良好な状態で遺存しており、これを除去してその下面を検出した。

浅間B軽石層の下面はこの地域の原地形を反映して、南西から北東の方向に緩やかに下る自然の傾斜地形を示している。標高は調査区域の西端部が89.1m、東端部が88.3m、比高80cmで、平均的な勾配は約0.8%である。浅間B軽石層直下の基本土層V層は、東西約100mに及ぶ調査区域の西側と東側ではその様相が微妙に異なる。すなわち、調査区域の西側から中央部にかけては褐色で粘性が比較的弱いものに対して、東側は灰黒色で粘性が強い傾向が認められた。

この調査面において水田に伴う畦畔などの遺構は一切確認できなかったが、調査区域の東端部から10mほどの地点には、北西から南東の方向に傾斜した比高15cmほどの傾斜変換点が認められた。この傾斜変換点から西側(微高地側)では、浅間B軽石層直下の土壌の粘性が比較的弱いのと対照的に、それより東側(低地側)ではそれが強い傾向が認められた。

一方、調査区域の東端部における浅間B軽石層以下の植物珪酸体分析の結果、浅間B軽石層直下のV層では12,500個/g、その下位のVI層からも7,200個/gと高い値でイネのプラント・オパールが検出された(「V 自然科学分析」23頁参照)。

以上のことから、浅間B軽石層直下の面で畦畔は一切検出できなかったが、その一部は水田であったものと考えられ、とりわけ調査区域の東端部から10mほどの範囲は水田であった可能性が高い。

なお、浅間B軽石層直下のV層の下位に位置するVI層は洪水起源の土壌であるが、この層も植物珪酸体分析から水田耕作土である可能性が高い。この層には明確なテフラの堆積が認められないことから、その年代は明らかではないが、下位に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことから、古墳時代、あるいはそれ以降の奈良・平安時代である可能性が高い。

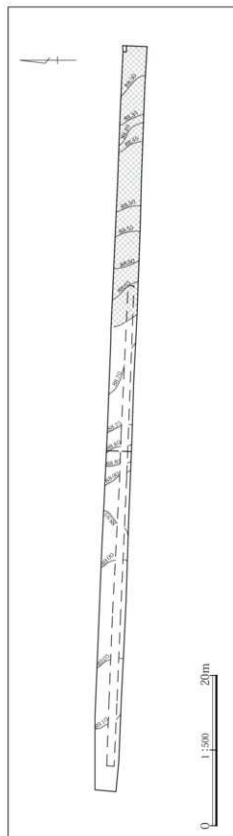


図7 第1面(浅間B軽石層下面)全体図

## II 発見された遺構と遺物

### 2 第2面(VIII層上面付近)

調査面の第2面は、基本土層VIII層の上面付近である。本来なら、一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含んだVII層(黒色粘質土或いは黒褐色粘質土)の上面を調査面とすべきであった。しかし、この面では基盤層と遺構の覆土とを明確に識別することが不可能であったことから、その識別が可能なVIII層の上面付近を調査面とした。

VIII層の下位に位置するIX層の高崎泥流堆積物は、約1.3万年前の浅間一板鼻黄色軽石(As-YP)の上位に位置している。一方、調査面上位のVII層には一部に3世紀後半の浅間C軽石と考えられる白色軽石を含んでいる。したがって、この調査面は約1.3万年前以降、古墳時代前期以前で、おそらく縄文時代に比定できるものと考えられる。

基本土層VIII層は、IX層高崎泥流堆積物の上位に位置する灰黄褐色シルトであるが、東西約100mの調査区域の西側と東側では状況が異なっている。すなわち、調査区域の西側と中央部では、IX層高崎泥流堆積物の上位に明確に認められる。しかし、調査区域の東側ではIX層高崎泥流堆積物の上位が黒色粘質土となり、VIII層は認められない。これは、調査区域の東側が低地を形成していたことに起因するものと考えられる。したがって、調査区域の東側においては、VIII層の上位付近をこの調査面の相当層とした。

調査面であるVIII層上面付近は、南西から北東の方向に緩やかに下る傾斜地形を示している。標高は調査区域の西端部が88.8m、東端部が87.8m、比高1.0mで、平均的な勾配は約1.0%であるが、その傾斜は全体に西半部が緩く、東半部が急となる。また、調査区域の中央部に長さ20mほどの傾斜が緩い部分があり、この部分を境に東側は傾斜が急となり、この地点が傾斜変換点となる。つまり、この調査面においては調査区域の西側が微高地で、東に向かって緩やかに傾斜し、東端部付近が低地となる地形を呈している。なお、調査区域西端部の西側は上中居遺跡群の微高地に続き、東端部の東側は平成17年調査の中居町一丁目遺跡の微高地に続く。

この調査面で確認した遺構は、調査区域西側の緩傾斜地付近で竪穴住居1棟、溝4条、調査区域の中央部東側の傾斜変換点付近で溝2条で、中央部の緩傾斜地と東端部の低地部には遺構が立地しない。

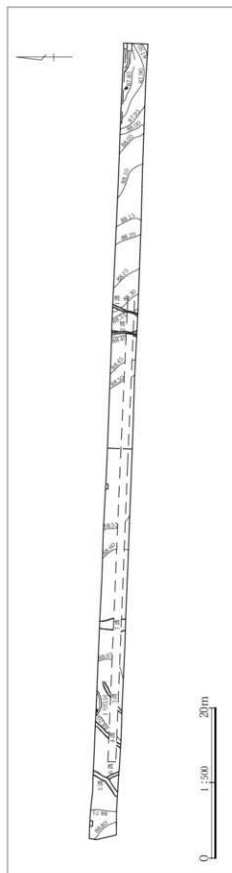


図8 第2面(VIII層上面付近)全体図



## (1) 竪穴住居

## 1号住居(写真PL.7)

**検出** 調査面第2面の、基本土層Ⅶ層上面付近で検出。  
**形状・規模** 住居北側の大部分が調査区域外で全形は不明だが、確認した平面形が緩やかな弧を描くことから円形と推定。確認した弦長は3.3mで、この弦長と弧長から推定する住居の直径は約4.8m。**床面** 基盤層を50cm掘り込んで床面とする。確認した範囲の床面は全体に平坦で整っているが、硬く踏み固められた痕跡がない。**柱穴** 確認した範囲に柱穴は認められない。**炉・竈** 確認した範囲には炉、竈ともに認められない。**壁溝** 無し。**貯蔵穴** 確認した範囲には認められない。**遺物** 覆土内も含めて、伴出遺物は皆無。**重複** 無し。**面積** 計測不可能。**年代** 伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、上位に位置するⅦ層の一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことから、古墳時代以前と推定。**所見** 出土遺物からの年代は不明だが、テフラを含む層位、円形と想定される住居の平面形及び、この調査面の遺構外において縄文時代中・後期の土器片が出土していることを考慮すると(12頁参照)、縄文時代の住居である可能性が高いものと考えられる。

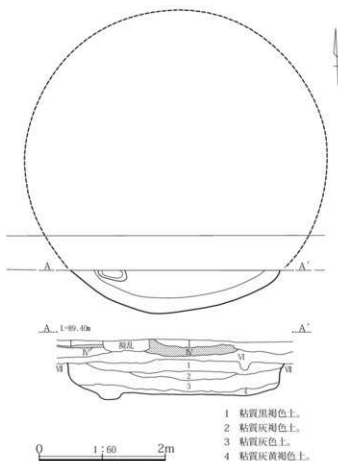


図9 1号住居

## (2) 溝

## 1号溝(写真PL.7)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。**規模・形状** 確認上で上幅40cm、下幅25cm、深さ10cm。土層断面においてⅦ層上面までの立ち上がりを確認し、この面における規模は上幅1.3m、下幅25cm、深さ45cmで、断面形は緩やかな船底状。**走行** 南西から北東の方向に緩やかに下る僅かな傾斜変換点付近を、南南西から北北東の方向に等高線を鋭角に横切る形で走行。方位 $N-20^{\circ}-E$ 。底面の標高は南側が高く北側が低い。調査区域の南端部と北端部の比高は約5cmで、勾配は約1.4%。**覆土** 中位に灰白色の細粒洪水砂を確認。**遺物** 無し。**重複** 無し。**年代** 伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠くが、土層断面上の確認面の下位に位置するⅦ層の一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含み、溝の上位に天仁元年(1108)の浅間B軽石(As-B)が堆積することから、古墳時代以降で、平安時代以前と推定。**所見** 詳細な年代及び性格は不明。

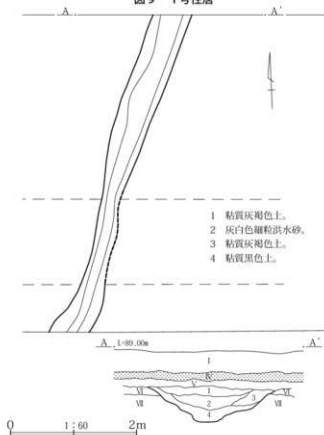


図10 1号溝

## II 発見された遺構と遺物

### 2号溝(写真PL.7)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。規模・形状 確認面で上幅30cm、下幅10cm、深さ20cmで、底面の断面形は逆台形状。溝の上半部に、現水田耕作土の耕作時期の直前段階と考えられる攪乱を受けるため、底面付近のみの検出で、土層断面上の立ち上がりの層位は不明。**走行** 遺跡の中央部よりやや東側に位置する、南西から北東の方向に緩やかに下る僅かな傾斜変換点付近を、おそらく南から北の方向にほぼ直線的に走行。東側約3mに位置する1号溝とは、位置及び走行が比較的近似してほぼ平行する。方位 $N-1^{\circ}-E$ 。調査区域の南端部と北端部の底面の標高は、北端部が約2cm低いほぼ平坦。**遺物** 無し。**重複** 無し。**年代** 伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠く。**所見** 南西から北東の方向にかけて下る遺跡周辺の地形から、おそらく南西から北東の方向に傾斜するものと考えられるが、詳細な年代及び性格は不明。

### 3号溝(写真PL.7)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。規模・形状 確認面で上幅40cm、下幅30cm、深さ20cmで、北東端部は溝が途切れて確認できない。南壁の土層断面においてⅦ層上面までの立ち上がりを確認し、この面における規模は上幅70cm、下幅30cm、深さ40cmで、断面形は緩やかな船底状。**走行** 西から東の方向に緩やかに下る傾斜地を、南西から北東の方向にかけて等高線を斜めに横切る形で

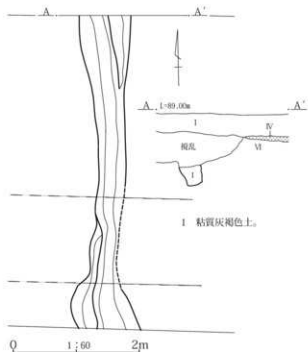
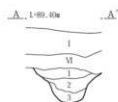


図11 2号溝

走行。方位 $N-59^{\circ}-E$ 。溝の南端部と北端部の底面の標高は、北端部が約2cm低いほぼ平坦。**遺物** 無し。**重複** 無し。**年代** 伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠くが、土層断面上の確認面であるⅦ層の一部に、3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことから、古墳時代の可能性が考えられる。**所見** 詳細な年代及び性格は不明。



- 1 粘質黒褐色土。
- 2 粘質灰黒色土。
- 3 灰褐色シルト。

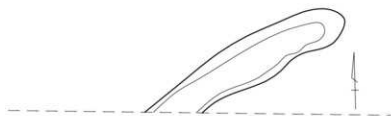


図12 3号溝

## 4号溝(写真PL.8)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。規模・形状 確認面で上幅50cm、下幅35cm、深さ20cm。土層断面でⅦ層上面までの立ち上がりを確認し、この面における規模は上幅90cm、下幅35cm、深さ40cmで、断面形は緩やかな船底状。走行 西から東の方向に緩やかに下る傾斜地を、南西から北東にかけて等高線を斜めに横切る形で走行。方位 $N-42^{\circ}-E$ 。溝の南端部と北端部の底面の標高はほぼ平坦。遺物 無し。重複 無し。年代 伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠くが、土層断面上の確認面であるⅦ層の一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことから、古墳時代の可能性が考えられる。

**所見** 詳細な年代及び性格は不明。

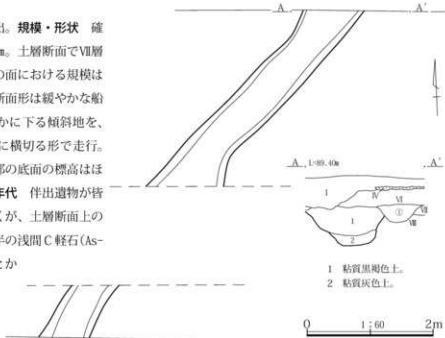


図13 4号溝

## 5号溝(写真PL.9、遺物観察12頁)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。規模・形状 確認面で上幅60cm、下幅40cm、深さ20cmで、断面形はU字状。土層断面でⅦ層上面までの立ち上がりを確認。走行 西から東の方向に緩やかに下る傾斜地を、南西から北東にかけて、等高線を斜めに横切る形で緩やかに蛇行。方位 $N-41^{\circ}-E$ 。溝の南端部と北端部の底面の標高は、北端部がやや高いがほぼ平坦。遺物 覆土内からS字状口縁台付甕の破片が2点出土。重複 無し。年代 土層断面上の確認面であるⅦ層の一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことと、伴出遺物から古墳時代前期と推定。所見 南西から北東の方向にかけて下る遺跡周辺の地形から、おそらく南西から北東の方向に傾斜するものと考えられるが、その性格は不明。

## 6号溝(写真PL.8)

**検出** 基本土層Ⅶ層の上面付近で検出。規模・形状 確認面で上幅40cm、下幅30cm、深さ10cmで、断面形は逆台形状。土層断面においてⅦ層上面までの立ち上がりを確認。走行 西から東の方向に緩やかに下る傾斜地を、南東から北西にかけて走行し、北西端部で5号溝とほぼ直交する形で接続。方位 $N-29^{\circ}-W$ 。溝の南端部と北端部の底面の標高はほぼ平坦。遺物 無し。重複 5号溝と「重複」するが、6号溝が5号溝を超えて確認できないことと、両者の覆土が比較的近似していることから、同

時存在した接続(分岐)と判断。年代 伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠くが、土層断面上の確認面であるⅦ層の一部に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)と考えられる白色軽石を含むことと、同時存在と判断した5号溝が古墳時代前期と考えられることから、古墳時代前期と推定。所見 5号溝に接続し、この遺跡で南東から北西の方向に走行する唯一の溝だが、その性格は不明。

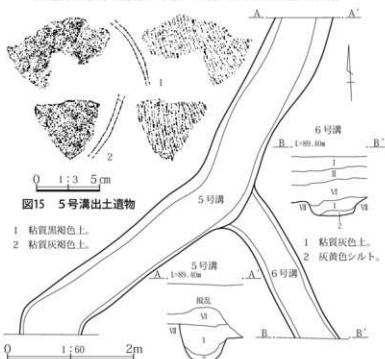


図15 5号溝出土遺物

- 1 粘質黒褐色土。  
2 粘質灰色土。

図14 5・6号溝

## II 発見された遺構と遺物

### (3) 遺構外出土遺物

№9の縄文土器を除いていずれも調査面第2面からの出土で、概ね基本土層Ⅶ層を中心としている。調査区域の東半部を中心に出土し、縄文土器は数点、古墳時代前

期の土器は約20点ほどが出土している。№1の土師器表は、整形技法と想定する器形の特徴から、近畿地方から搬入された布留式土器の可能性が高い(13頁参照)。

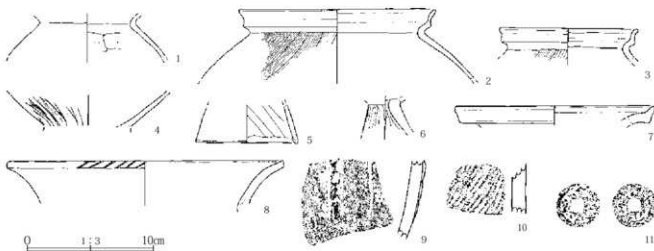


図16 遺構外出土遺物

### (4) 調査のまとめ

この遺跡では、縄文時代の可能性のある住居1軒と、古墳時代～平安時代の溝6条を確認した。溝の性格はいずれも判然としなが、少なくともこのうちの2条は古墳時代前期に属す。さて、この遺跡には当初、古墳時代～平安時代の集落が想定された。これは遺跡の東・西側にそれぞれ隣接する中居町一丁目遺跡(平成17年調査)及び、上中居遺跡群で該期の集落が確認されていたためである(付図2参照)。結果としてこの遺跡では該期の集落

は確認できなかったが、これはこの遺跡の地形に起因する可能性が高い。すなわち、この遺跡の地形は東西に隣接する遺跡より僅かに低く、集落が立地しない僅かな谷地形を呈するためと考えられ、これはこの遺跡にのみ浅間B軽石の一次堆積層がほぼ全域に遺存することを傍証とする(図6)。こうした意味で、この遺跡の調査はこの範囲が微低地であったこと、こうした微妙な地形と遺跡立地を考える上で、示唆的な資料を提供したと言えよう。

## III 遺物観察表

### 5号溝

番号	種類	出土レベル	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土	形・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	土師器 台付表	覆土	口一底一 高一	①良好 ②鈍い赤褐色 ③粗砂粒	外面 胴部縦位刷毛目。 内面 胴部撫で。	胴部破片
2	土師器 台付表	覆土	口一底一 高一	①良好 ②灰黄褐色 ③粗砂粒	外面 胴部斜縦位刷毛目。 内面 胴部撫で。	胴部破片

### 遺構外出土遺物

1	土師器 表	口一底一 高一	①良好 ②鈍い黄褐色 ③粗砂粒	外面 胴部縦撫で。内面 胴部縦位削り。	胴部上位破片 布留式土器
2	土師器 台付表	口(15.4)底一 高一	①良好 ②鈍い黄褐色 ③粗砂粒	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	口～胴部上位破片
3	土師器 台付表	口(11.0)底一 高一	①良好 ②浅黄色 ③粗砂粒	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	口～胴部上位破片
4	土師器 台付表	口一底一 高一	①良好 ②灰黄褐色 ③粗砂粒	外面 胴部斜縦位刷毛目。 内面 胴部撫で。	胴部下位破片
5	土師器 台付表	口一底(8.0) 高一	①良好 ②鈍い黄褐色 ③粗砂粒	外面 台部縦撫で。 内面 台部縦撫で後撫で。	台部下位破片 端部折り返し
6	土師器 器台	口一底一 高一	①やや軟質 ②褐色 ③粗砂粒	外面 脚部縦位削り。 内面 脚部縦撫で。	脚部上位破片 器受部底部穿孔
7	土師器 器	口(15.6)底一 高一	①良好 ②黄灰色 ③粗砂粒	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	口縁部破片
8	土師器 器	口(21.8)底一 高一	①良好 ②鈍い黄褐色 ③粗砂粒	外面 口縁部横撫で。口唇部平坦面に刺突文。 内面 口縁部横撫で。	口縁部破片
9	縄文土器 深鉢	口一底一 高一	①良好 ②浅黄褐色 ③粗砂、白・黒色粒、石英	斜位の刻みを付した隆帯、沈線を垂下。	胴部破片 移名寺I式
10	縄文土器 深鉢	口一底一 高一	①良好 ②褐色 ③粗砂、白・黒色粒	R.I.縄文を縦位捺紋。	胴部破片 加賀利E式
11	古銭	径2.35 厚さ0.15 孔径0.64 重さ3.04g	渡来銭 銘文が読み取れず不明。判読は「□□□寶」のみ。	完全	

## IV 調査の総括

## 群馬県下出土の布留式甕について

## 1. はじめに

高崎市・中居町一丁目遺跡では、調査面第2面の遺構外から、古墳時代前期の土器の小破片8点が出土した(図17)。これらは調査区域東半部の低地を中心に出土したが、周辺に該期の遺構はなく、また摩滅の痕跡が少ないことから、周辺の微高地から流れ込んだものと思われる。

これらの中に器肉が約2mmと薄く、外面に横撫で、内面に横位篋削りを施す甕が存在する(図17-1)。これはその整形技法と、想定する器形の特徴から、近畿地方から直接搬入された布留式土器か、或いはその影響下で作られた布留式系土器に比定されるものと考えられる。

同様な土器は、東側に隣接する平成17年調査の中居町一丁目遺跡(財)群馬県埋文事業団2007)での確認例はないが、西側に隣接する上中居遺跡群で出土例が確認されている(高崎市教委2009)。しかし、群馬県下において布留式土器の甕(以下「布留式甕」)或いは布留式系土器の甕(以下「布留式系甕」)の出土例は極めて少なく、その様相には不明な点が多い<sup>4)</sup>。

したがって、ここでは群馬県下で出土した古墳時代前期の布留式甕或いは布留式系甕を、主として伴出するS字状口縁台付甕(以下「S字甕」)とともに概観し、その様相の一端を明らかにしたい。なお、土器が搬入品か否かの判定は難しいが、ここでは上中居遺跡群を除いて搬入品の可能性のある布留式甕を対象とした。

## 2. 群馬県出土の主な布留式甕

上中居遺跡群SZ1(高崎市上中居町、図18、高崎市教委2009)：内法9.3mの方形周溝墓(SZ1)の周溝内から、甕の上半部が出土している(図18-1)。口唇部は丸く収めるが胴部外面に浅い不定方向の刷毛目、内面に斜位の篋削りを施す。報告者は、布留甕とS字甕の折衷土器との判断をしている。S字甕と単口縁の甕が伴出する。

寺尾町下遺跡遺物集中心点下面(高崎市寺尾町、図19、(財)群馬県埋文事業団2002)：遺物集中心点から、甕の上半部や口縁部6点が出土している(図19-1~6)。いずれも口唇部を僅かに内側に肥厚させ、胴部外面に横位刷毛目、内面に横位・斜横位の篋削りを施す。調査時に

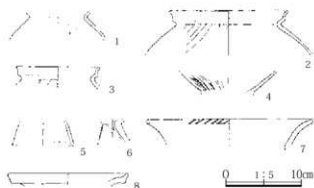


図17 中居町一丁目遺跡遺構外出土遺物

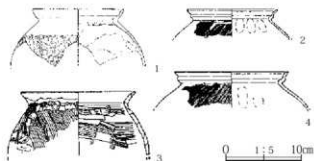


図18 上中居遺跡群方形周溝墓(SZ1)出土遺物

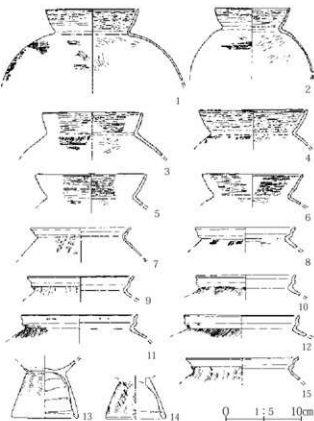


図19 寺尾町下遺跡遺物集中心点下面出土遺物

#### IV 調査の総括

において、出土層位は伴出遺物とともに必ずしも明確に把握されている訳ではなく、掲載したS字襷は筆者の抽出によるもので、これらの同時性は明らかではない。

**山王若宮II遺跡H-2号住居**(前橋市山王町, 図20, 前橋市埋文発掘調査団2000): 一辺5.9mのH-2号住居から、甕の上半部1点が出土している(図20-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位刷毛目後横位刷毛目、胴部内面は頭部のやや下位まで横位塗削りを施す。伴出するS字襷は肩部に横位羽毛目を施すものが存在するが、口縁部の外反度はやや強くその段差は比較的小さい。

**磯之宮遺跡9号住居**(太田市大字台之郷, 図21, 太田市教委1986): 短軸6.8m、長軸7.6mの9号住居から、下位を欠損した甕が出土している(図21-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位刷毛目後横位刷毛目、胴部内面は頭部のやや下位まで斜横位塗削りを施す。報告によると、同様の甕で別個体の胴部片が出土している。S字襷と単口縁で平底の甕(以下「平甕」)が伴出する。S字襷は肩部に横位羽毛目を施し、口縁部外面の屈曲は明瞭だが、内面に段差はほとんど認められない(図21-2)。

**富沢古墳群13号住居**(太田市大字富沢, 図22, 太田市教委1991): 短軸5.5m、長軸6.5mの13号住居から、甕1点が出土している(図22-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位羽毛目、内面は上半に斜横位羽毛目後、間隔を空けた縦位指撫で、下半に横位塗撫を施し、主として上半に指頭圧痕を残す。伴出遺物には平甕、埴、高環、器台、壺などがあるが、S字襷は出土していない。

**御正作遺跡11号土坑**(邑楽部大泉町下小泉, 図23, 大泉町教委1984): 直径35cm、深さ40cmの半円形を呈する11号土坑の覆土中位から、下位を欠損した甕1点が出土している(図23-1)。口唇部は丸く取めるようであるが、胴部外面上半に斜縦位羽毛目後斜横位羽毛目、内面に斜横位塗削りを施す。覆土中より埴の上半部、高環の脚部が出土し、報告では甕の台部が出土したとある。

**一本杉II遺跡26号溝**(旧新田町新田町村田, 図24, 新田町教委2000): 幅1.3~2.0m、深さ0~35cmの26号溝の覆土内から、甕の上半部1点が出土している(図24-1)。口唇部を僅かに内側に肥厚させ、口縁部内外面に

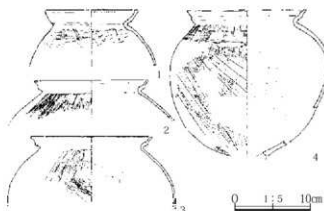


図20 山王若宮II遺跡H-2号住居出土遺物

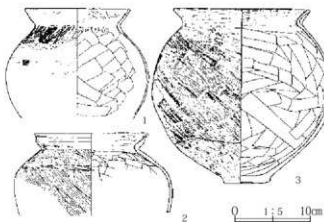


図21 磯之宮遺跡9号住居出土遺物

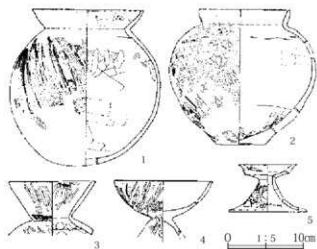


図22 富沢古墳群13号住居出土遺物

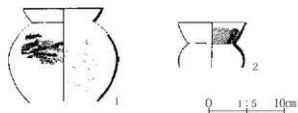


図23 御正作遺跡11号土坑出土遺物

横撫で、胴部外面に縦位・横位羽目、内面に横位篋削りを施す。埴、器台、高环、壺、単口縁甕などの他、多量のS字甕が伴出する。S字甕は口縁部などに形態の差が認められ、覆土の中・下位からの出土であることを考慮すると、これらは全て同時期ではなくある程度の時間幅をもつ可能性が高い。なお、掲載した土器群は筆者の抽出による出土物の極一部で、これらの同時性は明らかではない。

以上、県下の布留式甕、或いはその影響下で作られたと考えられる布留式系甕を概観してきた。この他にも例えば行幸田山遺跡1号墳(渋川市)、脇屋深町遺跡1号住居(太田市)、熊野堂遺跡4区22号住居(旧群馬郡群馬町)などの出土例があるが、これらはいずれも布留式甕の模倣である可能性が高いものと判断されるので、ここではとりあえず割愛した。

### 3. 群馬県下における布留式甕の分布

2章で概観した布留式甕の分布状況を概観すると、県下に広く分布するのではなく、大きくは高崎市周辺と太田市周辺の二か所にその分布が集中していることが分かる(図25)。全体の類別が少ないうえ、この分布傾向の確実性が高いとは言えないが、例えばこれに先述した明らかに布留式甕を模倣した例を加えたとしても、この偏在性を大きく覆す状況には至らない。

また、群馬県下では昭和40年代以降、高速自動車道、新幹線、工業・住宅団地、ほ場整備などの大規模開発に伴う発掘調査が進行し、膨大な量の考古資料が蓄積されてきたことを考慮すると、今後この類の資料が飛躍的に増加する可能性は低いものと考えられる。

したがって、県下における布留式甕は、いずれも平野部の高崎市周辺と太田市周辺を中心とした偏在する二極の分布を、その傾向として看取することができる。

### 4. 県下の布留式甕とS字甕の型式比定と平行性

ここでは2章で概観した布留式甕の型式比定と、伴出するS字甕との平行性について検討してみたい。

中居町一丁目遺跡の布留式甕は、小破片のために詳細な比定は不可能であるが、整形技法の特徴などから布留式古段階に位置付けられるものと考えられる。一方、これと同様に遺構外から出土したS字甕は、口縁部及び胴部の形状から東海地方S字甕編年(赤塚1986・1988)のC類段階の特徴を備えている。

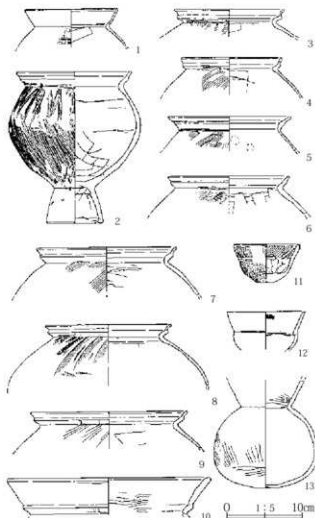


図24 一本杉II遺跡26号溝出土遺物



1:中居町一丁目遺跡 2:上中居遺跡群 3:寺尾町下遺跡 4:山王宮II遺跡 5:磯之宮遺跡 6:富沢古墳群 7:御正作遺跡 8:一本杉II遺跡

図25 布留式土器出土遺跡位置図

#### IV 調査の総括

寺尾町下遺跡の布留式甕は、6個体の甕の口縁部にそれぞれ僅かな形態の差が認められ、伴出するS字甕にも同様な傾向が認められる。したがって、これらはある程度時間幅をもつ可能性が高いが、口縁部の形状、胴部内面の篋削りの状況などから、総体的には布留式の古段階に位置付けられるものと考えられる。一方、S字甕は口縁部の形態がC・D類段階の特徴を備えている。但し、中居町一丁目遺跡と同様に、出土状況からこれらの同時性は明らかではない。

山王若宮Ⅱ遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部のやや下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、伴出するS字甕は肩部に横位羽毛目を施すものが存在するが、口縁部の形状からC類段階に位置付けられる。

磯之宮遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部の下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、S字甕は肩部に横位羽毛目を施し、受口状の口縁部を呈すことからB類段階と考えられ、あえて言えばその新段階に比定できよう。

富沢古墳群の布留式甕は、口縁部の形状から布留式の古段階に位置付けられる。この住居にS字甕はないが、伴出する埴、高環、器台の様相は、S字甕のほぼC類段階に平行するものと考えられる。一本杉Ⅱ遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部の下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、伴出するS字甕は口縁部に形態の差が認められ、これらはある程度時間幅をもつが、大勢としてC・D類段階の特徴を備えている。

以上、布留式甕とS字甕の型式比定を雑駁に試みた。この比定が正しいとすれば、ここに提示した布留式甕の多くは、大勢として布留式の古段階に位置付けられることになる。また、伴出するS字甕は必ずしもその共存関係が確定とは言えないが、大勢としてC・D類段階に位置付けられ、共存関係が比較的確定な山王若宮Ⅱ遺跡の例からは、C類段階がほぼ平行するものと考えられよう。但し、磯之宮遺跡のようにB類段階まで遡るものが存在することから、その一部はB類新段階に平行する可能性が考えられる。

さて、畿内大和と東海地方伊勢湾沿岸の土器の平行性について、布留式の古段階である布留0・1式は、伊勢

湾沿岸の廻間Ⅱ式新段階からⅢ式にかけて平行するとされている(赤塚2002)。したがって、布留式の古段階は、S字甕のB類新段階からC類にかけて平行することになる。つまり、これは先の群馬県下における布留式甕とS字甕との平行関係とほぼ一致し、その平行関係に大きな矛盾がないことの証左となろう。

#### 5. まとめ

以上、県下で出土した布留式甕或いは布留式系甕を、主として伴出するS字甕とともに概観してきた。類例が少ないことからその様相は不明な点が多いが、現時点では高崎市周辺と太田市周辺の二極集中的な分布を示し、おそらく今後もこの図式が大きく変わる可能性は低い。また、出土した布留式甕の多くはその古段階に属し、東海地方におけるS字甕編年の、B類新段階～C類段階に平行する可能性が高いものとの想定が可能である。

なお、先述したように今後この類の資料が飛躍的に増加する可能性は低い。したがって、これが布留式甕の実態を示している可能性が高く、むしろこの類例の少なさに何らかの意味があるものと考えられる。また、ここではその認識が比較的容易な甕を対象としたが、例えば埴、高環、壺なども含めて、布留式土器の分布の史的意義を検討することが今後の課題となろう。

本稿の作成にあたって、赤塚次郎・関川高功・田中清美・寺沢薫・深澤敦仁・三浦京子・右島和夫氏からご指導を頂き、関川高功・寺沢薫氏には、一部の布留式甕を実見して頂き、そのご所見を賜った。文末ながら、記して深甚なる感謝の意を表す次第です。

#### 引用・参考文献

- 赤塚次郎 1986 「S字甕」 筑書'85 「年報昭和60年度」 愛知埋蔵文化財センター、赤塚次郎 1988 「最後の台付甕」 古代 第86号 早稲田大学考古学会
- 赤塚次郎 2002 「土器時代の編年と古墳文化」 『考古資料大観』 第2巻 赤生・古墳時代 土器Ⅱ 小学館
- 大泉町教育委員会 1984 『新正作遺跡』
- 太田市教育委員会 1986 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査報告』
- 太田市教育委員会 1991 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
- (財)群馬埋蔵文化財調査事業団 2002 「寺尾町下遺跡」
- (財)群馬埋蔵文化財調査事業団 2007 「中居町一丁目遺跡」
- 高崎市教育委員会 2009 「上中居遺跡群」
- 寺沢 薫 1987 「布留0式土器拡散論」 『同志社大学考古学シリーズⅢ』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 西川修一 1993 「関東における布留系土器について」 『庄内式土器研究Ⅳ』 庄内式土器研究会
- 新田町教育委員会 2000 「新田東部遺跡群Ⅱ(一本杉Ⅱ遺跡)」
- 前橋市埋蔵文化財調査団 2000 「山王若宮Ⅱ遺跡」

※1 群馬県下出土の布留式甕或いは布留式系土器に関する論考はほとんどなく、僅かに関東地方の布留式系土器を収集した西川修一氏によって扱われている程度である(西川1993)。



## 高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向

## 一 中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係一

## 1. はじめに

平成22年調査の高崎市・中居町一丁目遺跡(「中居町一丁目遺跡H22」)は、平成17年調査の中居町一丁目遺跡(「中居町一丁目遺跡H17」)、『財』群馬県埋文事業団(2007)の西側に隣接する同一の遺跡で、さらにこの遺跡の西側には高崎市教育委員会が発掘調査した上中居遺跡群(高崎市教委2009)が隣接する(図26・27)。中居町一丁目遺跡H22に古墳時代以降の住居は存在しないが、中居町一丁目遺跡H17においては、古墳時代前・中期の竪穴住居17軒と同前期の方形周溝墓1基が、また上中居遺跡群では古墳時代前・中・後期の竪穴住居45軒と、同前期の方形周溝墓2基がそれぞれ確認されている。

さて、市街化が進んだこの周辺地域では、調査要因の関係から小規模な調査範囲の遺跡が多く、その資料は断

片的なものが多かった。こうしたなかで、道路建設に伴うこれら一連の事業では、東西方向の合計が800m以上にも及ぶ範囲が発掘調査され、この地域における集落の動向を知る上で良好な資料を提供した。したがって、ここではこれらの住居の変遷を確認し、この動向と中居町一丁目遺跡H22において確認した水田耕作地との関係を検討してみたい。

なお、ここでの住居年代分類の基本は、畿内大和における布留0式が、東海地方伊勢湾沿岸の廻間Ⅱ式新段階からⅢ式古段階にかけて平行し(赤塚2002)、布留0式を3世紀後葉に位置付けた古墳時代前期の土器の年代観(寺沢1986・2000)及び、出現期を4世紀末～5世紀初頭に位置付けた須恵器編年に基づく、古墳時代中・後期の土器の年代観(坂口1988・2003)などに依拠した。



図26 周辺遺跡位置図(1:上中居遺跡群 2:中居町一丁目遺跡H22 3:中居町一丁目遺跡H17)

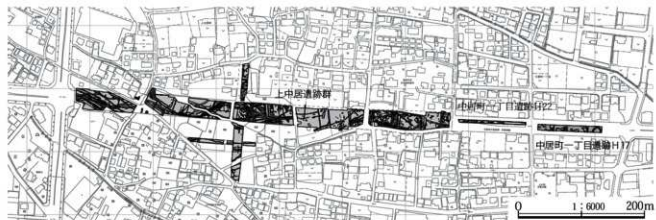


図27 周辺遺跡発掘区域図

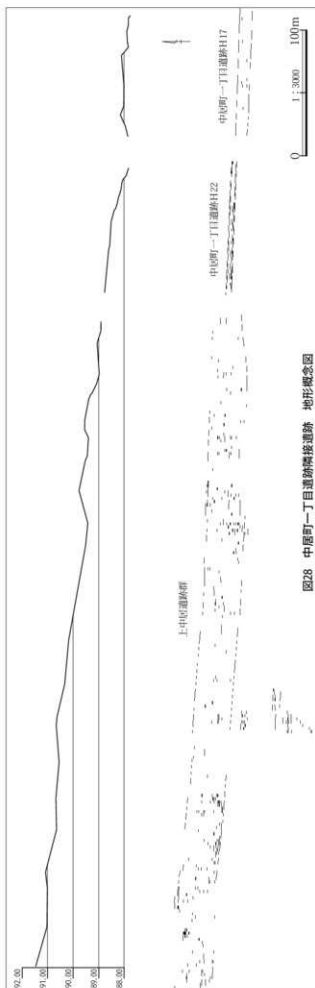


図28 中居町一丁目遺跡接続遺跡 地形概念図

## 2. 遺跡の地形、地層と集落立地

上中居遺跡群と中居町一丁目遺跡は、烏川と井野川に挟まれた高崎台地上で、井野川低地帯の右岸縁辺部に立地している。この烏川と井野川に挟まれた範囲には、小河川の旧流路による樹枝状の低地が形成されており、北西から南東の方向に微高地と低地が延びて、この微高地と低地の凹凸を繰り返す地形が形成されている。遺跡群の調査範囲は、北西から南東の方向に延びた微高地と低地を、東西方向に約800mで地形に対してやや斜めに横切る形となる。

この遺跡群の周辺では、上中居遺跡群の西端部付近が最も高く、この地点から東側に向かって徐々に傾斜し、中居町一丁目遺跡H17の東端部が最も低い。したがって、この周辺の地形は、大きくは西側から東側にかけての緩やかな傾斜地形を示す。古墳時代の竪穴住居などを確認した調査面の標高は、最も高い上中居遺跡群の西端部が約91.2mである。一方、最も低い中居町一丁目遺跡H17の東端部は約87.7mで、その比高は約3.5mとなる。この間の距離が約830mであることから、その平均的な勾配は約0.4%となる(図28)。

地層的にはそれぞれの遺跡及び調査区でその基本層序は異なるが、遺跡間を通して大別すると、地表面下約1m前後に約1万年前に堆積した①灰黄色のシルトである高崎泥流が位置し(新井他1993)、その上位に②灰黄褐色シルト乃至黒褐色土、その上位が③浅間B軽石(As-B)の一次堆積層乃至浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土で、さらにその上位が④浅間A軽石(As-A)を含む表土となる。古墳時代以降の竪穴住居などを検出した遺構確認面は、各遺跡及び調査区で必ずしも一様ではないようであるが、概ね②の前後と思われる。

基本土層において、古墳時代から平安時代の年代の示標となるテフラは、②の上位に含まれる3世紀後半に降下した浅間C軽石(As-C)<sup>1)</sup>と考えられる白色軽石と、③の天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石の一次堆積層であるが、いずれの遺跡でも浅間C軽石の一次堆積層は確認していない。また、浅間B軽石の一次堆積層は、中居町一丁目遺跡H22においては調査区域のほぼ全域に遺存しているが、これ以外の部分では上中居遺跡群の一部で確認されたに過ぎない。

さて、先述のとおりこの遺跡群の地形は、大きくは西

側から東側にかけての緩やかな傾斜地形を示しているが、その傾斜は一律ではなく、傾斜しながらも微高地と微低地の凹凸を繰り返している(図28)<sup>42</sup>。また、中居町一丁目遺跡H22の東端部付近は、この遺跡群のなかで最も低い谷部を形成している。

一方、住居の分布域をみると、上中居遺跡群の中央部付近と東端部付近、及び中居町一丁目遺跡H17のほぼ全域の3か所が主たる分布域となり、中居町一丁目遺跡H22に古墳時代以降の住居は存在しない(図28)。これらの住居の分布域と地形断面とを照合すると、集落は緩やかな傾斜地形のなかでもやや小高い微高地上を占地しており、集落が立地しない上中居遺跡群の中央部と東端部の間及び、中居町一丁目遺跡H22のほぼ全域は、僅かな低地部を形成しているものと判断できよう<sup>43</sup>。

### 3. 中居町一丁目遺跡H17の集落変遷

中居町一丁目遺跡H17で確認された17軒の住居のうち、出土土器からその年代を判定し得た住居は13軒である。これらは、古墳時代前期の3世紀中葉前後に出現し、同中期の5世紀前半にかけて、大きく増減することなく継続する(図29)。方形周溝墓は、3世紀代に属するものと考えられる。5世紀後半以降に集落は断絶し、次に出現するのは平安時代の9世紀前半である(図32)。

3世紀代の住居は、北西から南東の方向に形成された東西方向が約100mの微高地のほぼ全面に分布し、方形周溝墓は調査区域東端部の低地縁辺部に立地する(図31)。東端部のさらに東側は、井野川低地帯へ移行する傾斜地となる。一方調査区域の西端部は、中居町一丁目遺跡H22で確認した低地部への移行部にあたり、全体に遺構が希薄となる(図31)。

4世紀代と5世紀代の住居は、微高地の中央部付近にそれぞれ立地する。大きくは出現期である3世紀代の住居と同様な分布域をもつものと考えられるが、5世紀前半で集落は断絶し、その後出現するのは9世紀前半である。但し、この遺跡の調査範囲は南北方向が約10mと狭いことから、ここで確認した住居継続年代の蓋然性は高いとは言えない。

### 4. 上中居遺跡群の集落変遷

上中居遺跡群で確認された45軒の住居のうち、出土土器からその年代を判定し得た住居は36軒である。住居の分布域は調査区域の中央部と東端部の2か所に大きく分

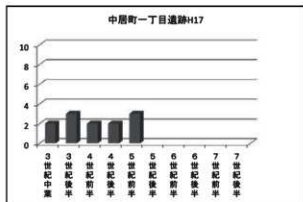


図29 中居町一丁目遺跡H17 住居変遷図

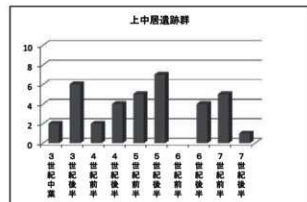


図30 上中居遺跡群 住居変遷図

かれ、この部分は僅かな低地を挟んだ微高地となる(図28)。これらは中居町一丁目遺跡H17と同様に、古墳時代前期の3世紀中葉前後に出現するが、その後の継続性が大きく異なる。すなわち、中居町一丁目遺跡H17が5世紀前半で断絶するのに対して、上中居遺跡群では5世紀後半まで増加傾向で継続し、6世紀前半で一時期の空白があるものの、6世紀後半から7世紀代にかけて再び継続する(図30)。2基の方形周溝墓は、3・4世紀代に属するものと考えられる。なお、この遺跡群では奈良時代以降の住居は確認されていない。

この遺跡群は東西方向の調査範囲が約600mであるが、出現期である3世紀代の住居の大半は、調査区域東端部の150mほどの範囲に集中し、4世紀代の住居もほぼ同様な分布域をもつ(図31)。3・4世紀代の方形周溝墓もこの範囲内に分布するが、全体としては住居の分布域の西側部分に位置している。また、この東端部150mほどの範囲には5世紀代から7世紀代にかけての住居も分布することから、この範囲は3世紀代から7世紀代にかけて、6世紀前半の一時期を除いて、ほぼ継続した住居の立地が認められることになる。

Ⅳ 調査の総括

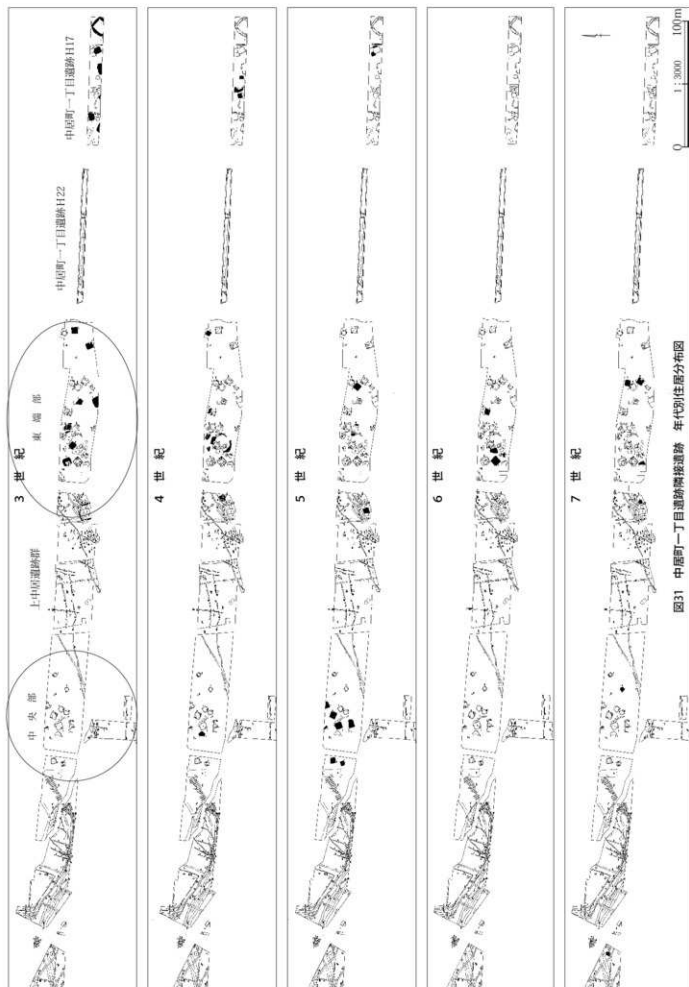


図31 中居町一丁目遺跡隣接道路 年代別住居分布図

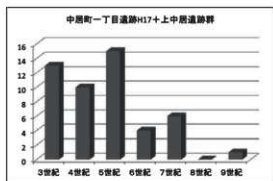


図32 中居町一丁目遺跡H17+上中居遺跡群 住居変遷図

特徴的な分布を示すのは5世紀代である。先述のように、調査区域東端部の150mほどの範囲には、3世紀代から7世紀代にかけて継続的に住居が立地する。しかしその一方で、5世紀代はそれまで比較的希薄であった調査区域中央部の微高地上への進出がみられる(図31)。さらに、ここの展開は一部に4世紀代、7世紀代の住居があるものの、基本的には5世紀代のみで短期間で、その後の6世紀代から7世紀代にかけての継続的な住居の立地はない。なお、この調査区域中央部と東端部の間は、微高地上の僅かな低地となる。

以上のように、上中居遺跡群においては6世紀前半の一時期に断絶が認められるものの、3世紀代から7世紀代にかけてはほぼ継続的に住居が立地する。また、その分布は、調査区域の東端部が3世紀代から7世紀代にかけて継続するのと対照的に、調査区域の中央部には、主として5世紀代に一時的な住居の進出がある。なお、6世紀前半の空白期については、時間的な断絶があるのか或いは調査区域内にたまたま立地していないのか、今のところ不明である。

### 5. 集落の動向と低地部での水田耕作の状況

先述のとおり、遺跡の周辺地域は北西から南東の方向に形成された微高地と低地を繰り返す地形を呈し、これら一連の遺跡の調査区域はこの地形を東西に横断する。中居町一丁目遺跡H22では、古墳時代以降の住居は存在せず、その西側部分の緩やかな傾斜地に古墳時代前期の溝が立地しているに過ぎない。つまり、中居町一丁目遺跡H17と上中居遺跡群の住居の大半は、中居町一丁目遺跡H22の調査範囲である東西約100mの低地部を挟んだ、両側の微高地上に立地していることになる(図31)。

これらの中居町一丁目遺跡H17と上中居遺跡群を合わ

### 中居町一丁目遺跡周辺集落の動向



図33 中居町一丁目遺跡H22 東端部基本土層図

せた住居の変遷をみると、その立地の大勢は古墳時代にあることが分かる(図32)。但し、中居町一丁目遺跡H17において、9世紀前半の住居1軒が確認されている。この遺跡は南北の調査範囲が狭いことから、その継続性については隣接地での発掘調査の成果を待たなければならないが、いずれにしても中居町一丁目遺跡H22の低地部を挟んだ両側で、少なくとも古墳時代前期の3世紀代から終末期の7世紀代にかけて、大きな時間的断絶を経ることなく集落が継続するとみることができよう。また、この変遷図で5世紀代の住居数がやや突出するのは、それまで比較的希薄であった上中居遺跡群の調査区域中央部の微高地上に、この年代の住居が一時的に進出する特徴的な分布を示すためである。

さて、中居町一丁目遺跡H22に住居が立地しないのは、この範囲の地形が東西に隣接する遺跡より僅かに低く、緩やかな谷地形を呈すためであると考えられる。これは、この範囲のみに天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)の一次堆積層が、ほぼ全域に良好な遺存状態を示していることが傍証となる(図33)。

ところで、この低地部の東端部における植物珪酸体分析の結果、浅間B軽石直下のV層灰白色粘質土中からは12,500個/g、その下位のVI層灰白色粘質土中から7,200個/g、さらに下位のVII層黒色粘質土から1,400個/gのイネのプラント・オパールがそれぞれ検出されている。各層の年代は、V層が天仁元年(1108)降下の浅間B軽石の直下であることから平安時代後期に、VII層がその上位に3世紀後半以降に降下した浅間C軽石(As-C)と思われる白色軽石を含むことから古墳時代前期に、その中間に位置す

#### IV 調査の総括

るVI層は古墳時代～平安時代にそれぞれ概ね比定できることになる。

したがって、中居町一丁目遺跡H22の調査範囲では、畦畔こそ未確認であり、途中で断絶した時期が存在した可能性はあるものの、少なくともその東端部においては浅間C軽石の降下年代である3世紀後半前後の古墳時代前期から、浅間B軽石の降下年代である12世紀初頭の平安時代後期にかけて、ほぼ継続的に水田耕作が行われた可能性が高いものと考えられる<sup>※1</sup>。中居町一丁目遺跡H17において確認された9世紀代の住居は、調査範囲が狭いことから1軒のみの確認であるが、これはこの低地部での水田耕作が平安時代まで継続したことを暗示しているものと考えられる。

このようにみると、中居町一丁目遺跡H22における水田耕作の継続性と、中居町一丁目遺跡H17及び上中居遺跡群における住居の継続性は、大勢としてほぼ一致していることとみることができよう。つまり、中居町一丁目遺跡H22の低地部を挟んだ両側に展開する3世紀代以降の住居群は、この低地部における水田耕作地を生産の基盤として成立し、その変遷は水田の開発・運営の過程を示すものとの想定が成り立つのである。

#### 6. おわりに

この遺跡周辺の集落の動向を概観し、その立地と変遷の過程を中居町一丁目遺跡H22の低地部における水田耕作地との関連で検討してきた。しかし、資料的な制約から6世紀前半の空白期と、奈良時代以降の変遷については言及することができなかった。また、上中居遺跡群における5世紀代の住居は、それまで分布が比較的希薄であった中央部の微高地上に進出する特徴的な分布を示すが、この要因もこの低地部における水田耕作との関連のみでは説明が難しい。集落が立地する中央部の微高地と遺跡東端部の間が僅かな低地を形成することから、この部分での新たな水田開発の可能性も考えられるが、現状では水田耕作の根拠となる資料を欠いている。

一方、中居町一丁目遺跡H22においては、遺構外からの出土ではあるが布留式製の小破片が出土し、また上中居遺跡群の1号方形周溝墓(SZ1)からは、布留式製とS字製の折衷的な製の破片が出土している。群馬県下における布留式土器の出土例は極めて少なく、その様相は明らかではないが、布留式土器の拡散を初期ヤマト政権

の勢力拡大との関係で捉えた見解があることから(寺沢1987)、これらはこの周辺地域における遺跡の性格の一端を暗示している可能性も考えられ、隣接地での発見に興味を持たれるところである。

以上、中居町一丁目遺跡周辺集落の動向を、近接する低地部での水田耕作地との関係で検討してきた。しかし、その関係を理解し得たのは極一部の範囲に過ぎない。これらは、近隣で発掘調査されている上中居辻薬師遺跡や高関村前遺跡などの集落遺跡の他、周辺に分布する墳墓も含めて、さらに広範囲に及ぶ遺跡群の総合的な検討に期する今後の課題である。なお、紙幅の都合で個々の住居の年代分類については割愛したが、ご容赦願いたい。

本稿の作成にあたっては、高崎市教育委員会の田口一郎氏、角田真也氏、大野義人氏に有益なご助言を賜った。文末ながら、記して感謝の意を表す次第である。

#### 引用・参考文献

- 赤塚次郎 2002 「土器タイプの偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻 弥生・古墳時代 上巻 小学館
- 新井雅之他 1993 「およそ1万年前に発生した高崎混濁の分布と起源」『日本地質学会第100年学術大会発表要旨』日本地質学会
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 「中居町一丁目遺跡」
- 坂口 一 1988 「東国須恵器の一種相」『考古学雑誌』第74巻1号 日本考古学会
- 坂口 一・須田貞樹 2003 「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第3巻 弥生・古墳時代 上巻 小学館
- 高崎市教育委員会 2009 「上中居遺跡群」
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 寺沢 薫 1987 「布留式土器の拡散」『同志社大学考古学シリーズⅢ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 寺沢 薫 2000 「王権誕生」日本の歴史第02巻 講談社

※1 古墳時代前期の土器の年代観において、畿内大和における布留0式が、東海地方伊勢湾沿いの廻間Ⅱ式新段階からⅢ式古段階にかけて平行し、これを3世紀後半に位置付けるという先前提提を立て、土器型式ではS字製編年のB類段階に比定できる浅間C軽石の降下年代は、従来の見解より古い3世紀後半からそれ以前の3世紀後半に位置付けられることになる。

※2 この地形断面図は、各遺跡において古墳時代の聖穴住居などを確認した調査面から、調査区域の北端部付近の標高を基として作成した。各遺跡及び調査区で基本順序が異なり、道幅確認面がそれぞれ多少異なることから、これはある特定の層位(年代)における地形の高さを示すものではなく、あくまでも古墳時代前後における地形断面の大まかな概念図である。

※3 調査区域が、北西から南東の方向に延びた微高地と低地を東西方向に横切ることから、この断面図の輪郭は地形の凹凸に対して直交せずにやや斜めの位置を取る。したがって、実際の微高地と低地の勾配は、この図よりやや急傾斜であると考えられる。

※4 但し、古墳時代前期に比定できるVI層黒色粘土質土については、イネのプラント・オーバー・オールが1,400個/gで、一般的な水田耕作の判断基準より少ない。また、試料の採取が所が調査区域東端部の1地点のみであることから、この層位における水田耕作の可能性及びその範囲については、今後隣接地での発掘調査による水田遺構の検出か、或いは植物性炭素分析による検証を必要とする。

## V 自然科学分析

### 中居町一丁目遺跡におけるプラント・オパール分析

中居町一丁目遺跡では、基本土層IV層の浅間B軽石直下の面、及び基本土層VII層の上面付近の2面を調査面とした。いずれの調査面でも畦畔などの水田に伴う遺構は未検出であったが、V層及びVII層は低地性の堆積物であった。また、この遺跡に隣接する平成17年調査の中居町一丁目遺跡及び上中居遺跡群は微高地上に立地することから、この低地は水田耕作地である可能性が考えられた。よってこの土壌の珪酸体分析から遺跡の性格を明らかにすべく、株式会社古環境研究所にその分析を委託した。分析結果は、以下のとおりである。

#### 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸( $\text{SiO}_2$ )が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山, 1984, 杉山, 2000)。

#### 2 試料

分析試料は、基本土層東端のV層～VII層から採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ )をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

#### 4 分析結果

プラント・オパール分析ではイネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表1・図34に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版(PL.10)に示す。

#### 5 まとめ

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

基本土層東端では、V層(試料1)からVII層(試料3～5)までの層準について分析を行った。その結果、V層(試料1)、VI層(試料2)、VII層上部(試料3)からイネが検出された。このうち、As-B直下のV層(試料1)では密度が12,500個/gとかなり高い値であり、VI層(試料2)でも7,200個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた

V 自然科学分析

可能性が高いと考えられる。Ⅶ層上部(試料3)では、密度が1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

以上、プラント・オパール分析の結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下のⅤ層およびその下位のⅥ層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

文献

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社。p.189-213。

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学。9。p.15-29。

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―。考古学と自然科学。17。p.73-85。

表1 中居町一丁目遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)		基本土層東端				
分類群	学名	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i>	125	72	14		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	22	21	7	36
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	125	94	128	136	179
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	84	151	312	293	350

推定生産量(単位: kg/ml・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.69	2.12	0.42		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.88	1.36	1.34	0.43	2.26
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	1.55	1.16	1.58	1.69	2.22
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	0.40	0.73	1.50	1.41	1.68

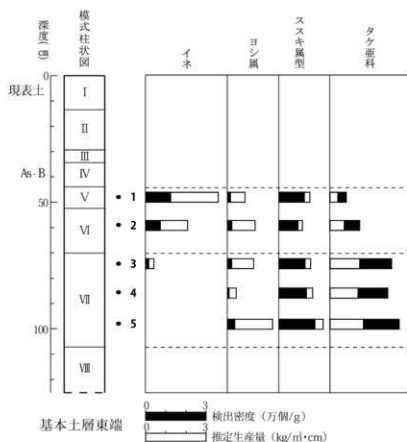


図34 中居町一丁目遺跡におけるプラント・オパール分析結果



## 写真図版



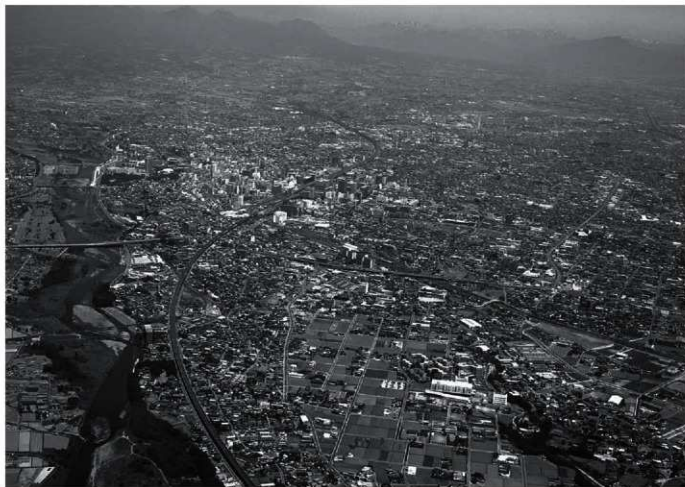
### ▲ 高崎台地と井野川低地帯 (東から望む)

約2.2万年前に形成された烏川から広瀬川にかけて広がる前橋台地のうち、写真左上方の烏川から右方の井野川低地帯にかけては、約1万年前の高崎泥流によって形成された平坦地で、特に高崎台地と呼ばれている。

弥生時代中期後半以降、高崎台地上には井野川低地帯の縁辺部を中心に数多くの遺跡が分布し、これは井野川低地帯における生産基盤としての開発過程を示しているものと考えられる。

中居町一丁目遺跡もそうした過程を物語る遺跡のひとつで、畿内に起源をもつ布留式甕の出土は、その様相の一端を象徴しているかのような(13頁「群馬県下の布留式甕について」参照)。





高崎市街地遠景(南から)



高崎市街地遠景(西から)



高崎市街地遠景(南東から)



高崎市街地遠景(東から)



発掘調査前風景(西から)



発掘調査前風景(東から)





第1面 浅間B軽石層下面(東半部、東から)



第1面 浅間B軽石層下面(東半部、東から)



第2面 W層上面付近(東半部, 西から)



第2面 W層上面付近(西半部, 西から)



1号住居土層断面(南から)



1号住居全景(南から)



1号溝土層断面(南から)



1号溝全景(南西から)



2号溝土層断面(南から)



2号溝全景(南西から)



3号溝土層断面(北から)



3号溝全景(南西から)



4号溝土層断面(南から)



4号溝全景(北西から)



5号溝土層断面(南から)



5号溝全景(南西から)



6号溝土層断面(北から)



6号溝全景(北西から)



基本土層(西端, 南から)



基本土層(中央, 南から)



基本土層(東端, 南から)





5号溝出土遺物



遺構外出土遺物

中居町一丁目遺跡の植物柱酸体(プラント・オパール)



イネ  
試料 1



イネ  
試料 1



イネ  
試料 2



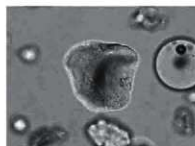
イネ (側面)  
試料 2



キビ族型  
試料 1



ヨシ属  
試料 5



ススキ属型  
試料 1



ススキ属型  
試料 4



ネザサ節型  
試料 2



ネザサ節型  
試料 5



表皮毛起源  
試料 2



棒状柱酸体  
試料 1

50μm



報 告 書 抄 録

書名ふりがな	なかいまちいっちょうめいせきさん
書 名	中居町一丁目遺跡3
副 書 名	(部)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	509
編 著 者 名	坂口 一
編 集 機 関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2010年10月25日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	なかいまちいっちょうめいせき
遺跡名	中居町一丁目遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしなかいまち
遺跡所在地	群馬県高崎市中居町
市町村コード	10202
遺跡番号	02277
北緯(日本測地系)	36° 19' 05"
東経(日本測地系)	139° 02' 18"
北緯(世界測地系)	36° 19' 17"
東経(世界測地系)	139° 02' 07"
調査期間	2010年02月01日～2010年02月28日
調査面積	444㎡
調査原因	道路建設
種別	集落・水田
主な時代	縄文・古墳・平安
遺跡概要	集落～縄文時代～竪穴住居1／古墳時代～溝2～古墳～平安時代～溝4／水田～平安時代
特記事項	天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石層直下の土壌の植物珪酸体分析から、調査区域の一部に水田を確認。調査面第2面の遺構外から古墳時代前期の布留式土器裏小破片が出土。
要約	平成17年調査の中居町一丁目遺跡の西側に隣接する同一の遺跡で、微低地にあたる。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第509集

## 中居町一丁目遺跡3

(都)3.3.8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成22年(2010)10月18日 印刷

平成22年(2010)10月25日 発行

編集・発行/財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地の2  
電話 (0279)52-2511(代表)  
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

---

印刷/杉浦印刷株式会社

# 中居町一丁目遺跡3

（発掘）3・3・8 高橋 敬夫  
（図解）3・3・8 高橋 敬夫  
（調査報告）3・3・8 高橋 敬夫  
（調査報告）3・3・8 高橋 敬夫

二〇一〇

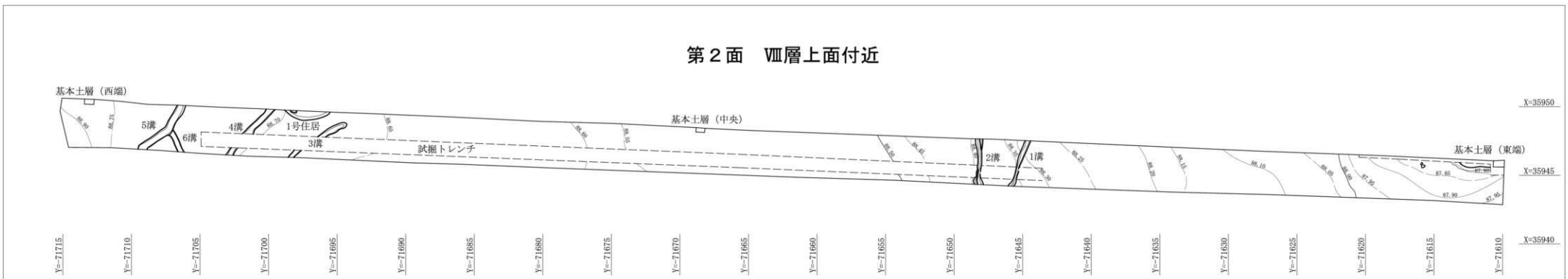
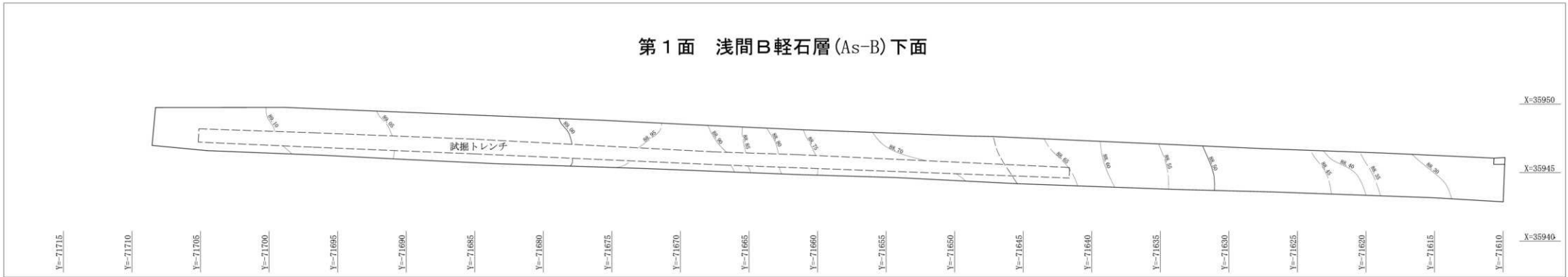
群馬県 高橋 敬夫  
群馬県 高橋 敬夫  
群馬県 高橋 敬夫  
群馬県 高橋 敬夫



# 付図1 中居町一丁目遺跡全体図

第1面 浅間B軽石層(As-B)下面

第2面 Ⅷ層上面付近



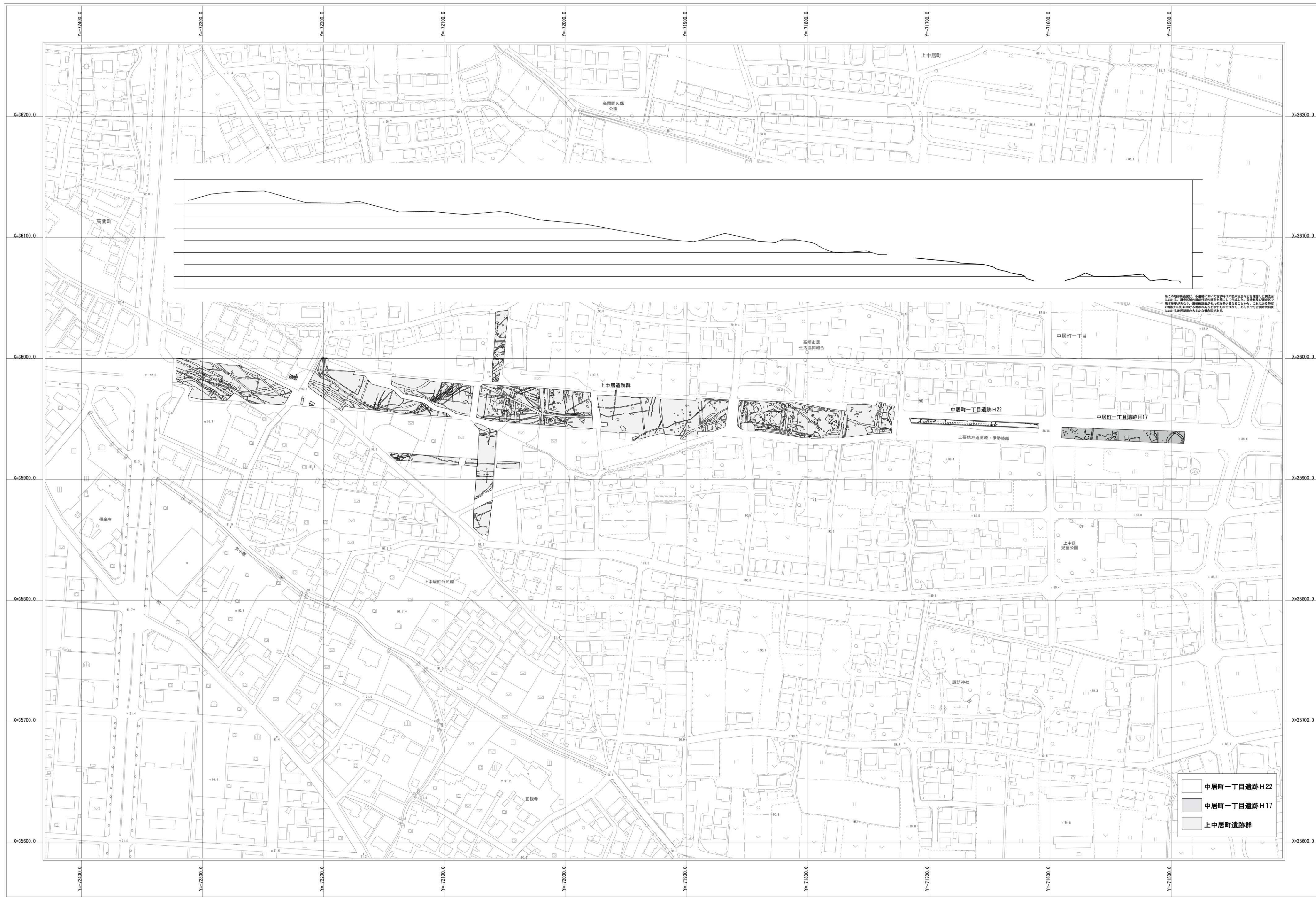
### 中居町一丁目遺跡 3

付図 1：第 1 面 浅間 B 軽石層下面全体図 ( )

第 2 面 層上面付近全体図 ( )



付図2 中居町一丁目遺跡 隣接遺跡集成図



※この図面は、調査結果に基づき、遺跡の位置や形状などを示したものであり、実際の遺跡の形状や位置と異なる場合があります。また、この図面は、調査結果に基づき、遺跡の位置や形状などを示したものであり、実際の遺跡の形状や位置と異なる場合があります。



中居町一丁目遺跡 3

付図 2：隣接遺跡集成図 ( )

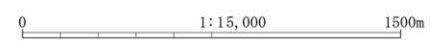
付図3 中居町一丁目遺跡 昭和30年測図 周辺地形図1

昭和三十年十月測図



高崎市役所

高崎市発行 昭和三十年十月測図「高崎2」地形図を編集

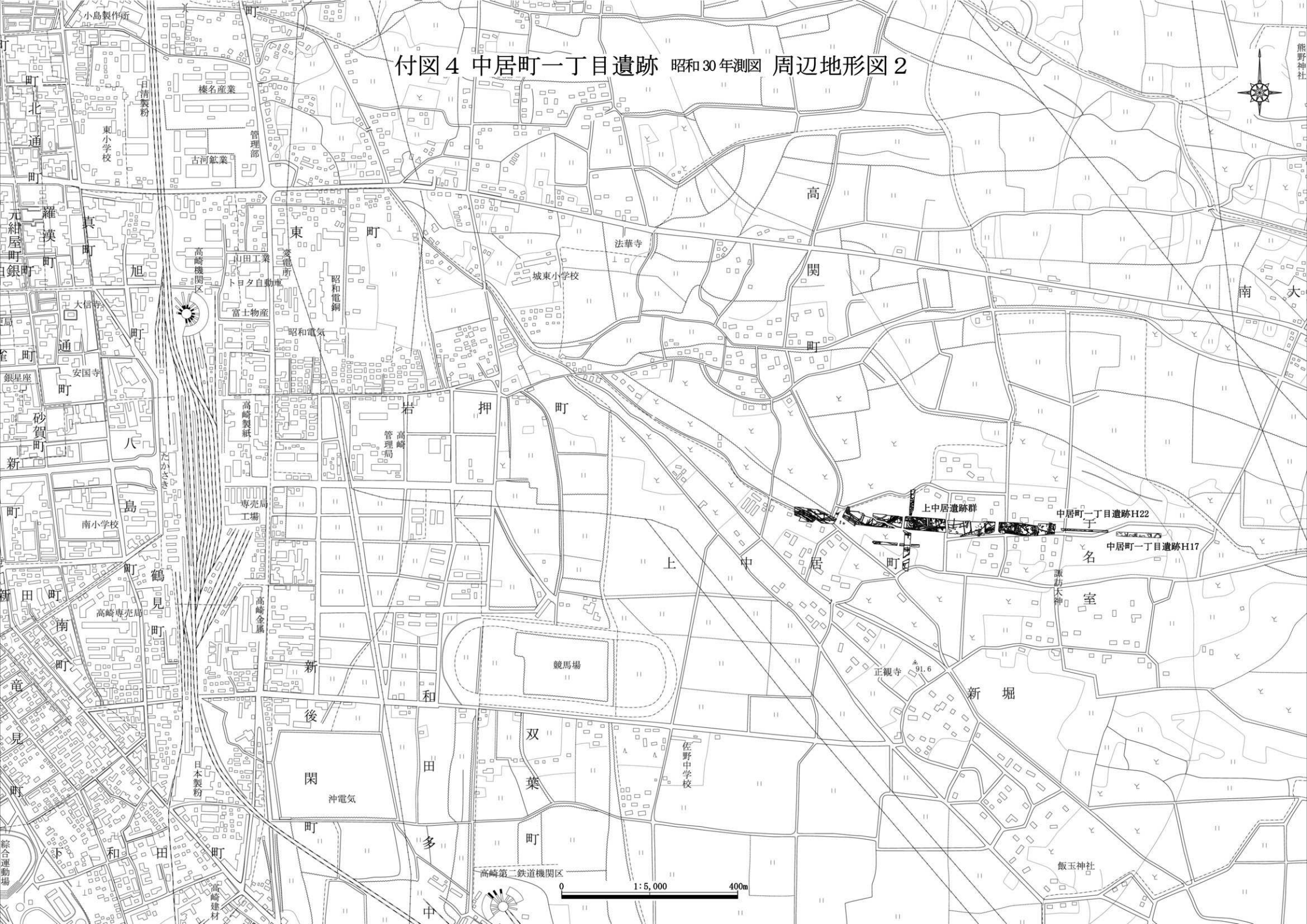


中居町一丁目遺跡 3

付図 3 : 昭和 30 年実測図 周辺地形図 1 ( )



付図4 中居町一丁目遺跡 昭和30年測図 周辺地形図2



0 1:5,000 400m

中居町一丁目遺跡 3

付図 4 : 昭和 30 年実測図 周辺地形図 2 ( )